
かむがたりうた

三宅やみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かむがたりうた

【Nコード】

N1837T

【作者名】

三宅やみ

【あらすじ】

人とはひとつだけ違う能力を持った少年少女の悲喜こもごも。現代ローファンタジーです。

第零章「ヒミツ」(1)

梭の手をやめ歌ふをきけば

??もつれた糸なら

ほどけもせうが

きれた糸ゆゑ

せんもなや。

竹久夢二「どんたく」

「ごめんな」

その言葉に、少女はぐったりとうなだれた。

人通りのない放課後の渡り廊下。そこにいたのは三人の中学生。手紙で呼び出された詰襟姿の少年は心底申し訳なさそうに頭を下げた。

「他に好きな人がおる」

それ以上は何も言わせられなくなる言葉に、一緒に来ていたもう一人の少女は涙ぐむ少女の肩を支えた。

「サイテー!」

肩を落とす少女の代わりにもう一人が言い捨てて、二人でその場から立ち去った。

「あー、ムカつく! メグは悪くないよ。あんな男こっちから願い下げ!」

帰り道で通学鞆を肩にかけなおしながら野田さなえは言った。

「ちょっと顔と頭と運動神経がいいからって調子に乗って！」

「う：うん、ありがと、けなせてないけど：」

涙を拭きながら肩までの髪を揺らした。

「でもダメ元だったし言えただけでもよかった。水吹くんは島村先輩もフラれたっていうし……」

「そう島村先輩が：」

当たり前のように聞いて、さなえは振り返った。

「島村先輩って三年の？」

島村先輩といえば校内一の美女と名高い男女共に憧れの存在だ。それをつるとはどれだけ理想が高いのだろう。

「え：つとく美人は好みじゃないのかも」

「：それフォローのつもり？」

さなえの言葉にメグの頭上に暗雲が立ちこめる。

その時だった。

白い大きな鳥が二人の頭上に現れた。

「な、何：？」

「あれ、飼育小屋の：」

鳥はくわえていた四葉のクローバーを一本メグの手のひらに乗せる。

「え？何これ……」

言葉を待たずに鳥は飼育小屋の方に飛び去っていった。

「あ、行っちゃう！私追いかけてみる！メグは？」

「わ、私は無理よ！さなえみたいに足速くないもん！」

もともとこんなことには消極的な少女は断った。

走り去るさなえが見えなくなってから、メグはクローバーを大切ににぎりしめた。

「よしよし、いつもありがとさんな」

飼育小屋の前で西夜は白い鳥に話しかけてきた。鳥も心得たようで少年の肩に止まってから飼育小屋に戻っていった。

「何それフツた相手みんなにそうしてるの？」

「え？あ？さっきの…」

「『さっきの』じゃない。私、二組の野田さなえ」

「さかえ？」

心底驚いたように目を丸くする。

「さ・な・え！」

「ああ、さなえさんな。びっくりした。ウチの知り合いと同じ名前か思ったやん。あ、ウチは…」

「知ってる。メグから散々聞かされた。一年三組水吹西夜くん」

ふと顔を直視して、さなえは目を伏せた。

初めて気づいた。

白い羽根が降る中で水吹くんが

「成績優秀スポーツ万能の有名人」

まるで

「関西弁は小学生のとき引越してきたから」

天使みたいだったって

「今のところ特定の彼女はいない」

バカなこと

「違う？」

「い…いや…」

「あの鳥何？まさか水吹くんがクローバーを届けさせたの？どうやって？お詫びのつもり？」

「どうやってって…うん…特技…かな？」

「特技って鳥にクローバーを届けさせるのが？」

「それだけやのうて、小さい頃から動物の言うことが分かるんや」

恋に堕ちるのは

「でもどうせ誰も信じへんから」

なんて簡単なことだろう

「これは秘密にしてな」

最後の一枚の羽根がさなえの肩に落ちた。

第零章「ヒミツ」(2)

「考えたらさ、男なんて水吹くんだけじゃないもんね。前向きに前向きに：ね、さなえ！」

学校から三駆行ったところにあるケーキバイキングの店でこれでもかとフルーツケーキを並べながらメグ：中本恵は言った。ちなみにもちろん校則違反である。

「：って、聞いている、さなえ？：さなえ！」

上の空を大声で現実に戻す。

「あ、ごめん！聞いてなかった！」

「もー！そーいえばあの鳥やっぱ水吹くんとカンケーあったの？」

「え：えつと：うーん」

ひとしきり悩んだ後、出した答えは

「秘密！」

「えゝ何それ？」

「えへへ」

「さつきからさなえ、なんか変」

翌日、理科室への教室移動のとき、偶然三組の教室前でさなえと恵は西夜と出くわした。西夜は罰が悪そうに恵の方を見る。恵は泣きそうな顔でさなえの背に隠れた。

「おはよっ」

その沈黙を破ったのは明るいさなえの声だった。

「おはよう、水吹くん」

長い髪を翻してとびきりの笑顔で言う。言って手を振ると隣の校舎の方に向かった。

「さ：さなえ：」

恵がおずおずと口を出す。

「フツーにしてればいいの！メグは悪いことしたんじゃないんだか

ら！」

「う…うん！」

恵が笑顔で頷いた。

「ありがとう、さなえ」

「い…いや」

その無邪気な笑みに、少々の罪悪感が胸の中を締めつけた。

（私が話したかっただけなのになあ）

第零章「ヒミツ」(3)

「水吹くん」

陸上部をサボって帰る西夜をさなえは掴まえた。

「あ、えっと…の…野田さん」

「やだなあ、そんなに怖がらないでよ」

言って一歩前に出る。

「サイテーって言ったの謝ろうと思って」

「いや、ウチが悪かったんやし」

「でも水吹くんに好きな人がいるって驚いたな」

「どんな人？私も知ってる人？」

「うゝん」

西夜はしばらく考えて、唇の前に人差し指をたてた。

「やっぱ秘密」

「えゝ！」

さなえはプーッと頬を膨らませた。

「水吹くんってさりげに謎な人だね。陸上部もエースのクセに幽霊部員だし」

「それは友達があんま熱心に誘うから、試しに測ってみたらタイムがよかっただけで…」

「でもどうせ住んでる所も秘密って…」

「え？ここやで」

突然立ち止まって西夜が指さした先は

「ここって…」

「うん、神社。親戚の家なんやけどここの離れに妹と居候中」

神社に続く長い石段の向こうに見える鳥居。地元の間人ならこの場所を知らない人はいないだろう。

「時実神社なら毎年初詣に行ってるよ」

「ほんま？ならお得意さんや。お賽銭奮発してな」

「ねえ、今度遊びに行っていていい？妹さんにも会いたいし」

「え？」この時の一瞬の間にさなえは気づかなかった。

「あ…え…っと、また…今度…今度な」

「うん、じゃあまた明日」

その時は本当に思ってた。

「うん、また明日」

友達でいいって

メグに幸せになってほしいって

思ってた

思ってたんだよ

「あー！」

朝、通学鞆を開けた途端叫び声をあげた。

「どうしたの？」

「メグ…どうしよ。数学の教科書忘れたー！」

「あーあ、橋元センセに、こってり絞られるんだね」

「うわーやだ…あ！三組って今日、数学あったよね。水吹くん
に借りてくる」

（なんで水吹くん？）

でも私は

ただバカで身勝手に

自分のことに

せいっぱいで

メグの気持ちも

水吹くんの気持ちも

全部無視していて

「あ、水吹くんだ」

帰り道、恵と他愛もない談笑をしていたら、歳の割に小柄な後ろ姿を見つけた。

「おゝい、水吹くん！」

「えっ、さなえ？」

西夜は振り返る。

「ああ中本さんと野田さん」

「今帰り？また部活サボったの？先輩に怒られるよ」

全て自分で

壊していたことに

気づかなかった

第零章「ヒミツ」(4)

「プレゼント？」

ある日、廊下で西夜と出くわした時だった。

「うん、来週よろ？ウチじゃ、何がいいか分からんで、見立てしてほしいんや」

「それいい！絶対喜ぶよ！」

「せやろ？」

「じゃあ土曜の十一時に駅の西口で」

駅に時間ぴったりに現れたさなえを西夜はもう待っていた。

「おはよー、あれ？髪下ろしてるやん」

「うん、校則で結んでただけだから」

「へー、そっちの方が可愛いで」

さなえは思わず頬を赤らめる。

(違う、特別な意味はないんだ)

「か、可愛いとか簡単に言わない方がいいわよ！」

そのまま切符を買って繁華街に向かう。軽いランチを済ませ、雑貨屋を数件回る。駅に着いたらもう陽は落ちていた。家まで送るという西夜にの言葉に遠慮しつつも甘えることにした。

(あれ：これさなえの：間違えて持って帰っちゃったんだ)

通学鞆を見て、恵は一冊余分に持っている国語の便覧に気づいた。

(宿題出てるから困るだろうなあ……)

携帯をかけてみるが、応えたのは『電波の届かない所にいるか…』というアナウンスだった。便覧を持って部屋を出る。

「お母さん、ちょっとさなえの家行ってくる」

「あら、もう遅いから気をつけるのよ」

「うん」

言うと玄関を駆け出した。

「今日はありがと」

家の前まで来て、西夜はニコツと笑った。

「おかげでええモンが見つかった。なんかお礼せえへんとな」

「えゝいいよ、そんなの」

「いや一日つき合うてもろたのにそんなわけにはいかんて」

さなえはふと思いついた。

「えゝじゃあねえ」

これを言ったら西夜がどんな反応を示すか試してみたかった。

困らせてみたい。ごくごく軽い気持ち。

「キスして」

言って振り返った。

「なゝんて」

途端

「ね」

さなえの唇に西夜の唇が重ねられた。目を見開いたのは、さなえと、恵。

ちようどその光景を目の当たりにした恵は、二人に気づかれないうちに踵を返した。便覧が音もなく地面に落ちたのには気づきもせず。

とても長い時間のようできっと一瞬だったのだろう。西夜はゆっくりと唇を放した。

「『お礼』やからね」

じゃあ、おやすみ、と言うと西夜も踵を返した。さなえは唇に指を当て後ろ姿が見えなくなるまで見つめていた。

ヤバイ

どんどん深みにハマってく

ようやくその場から立ち去ろうとしたとき、地面に落とされた自分の名前入りの便覧を見つけた。
「…メグ…？」

第零章「ヒミツ」(5)

月曜日の放課後、廊下の掃除をしていると走って帰る西夜が目に残った。

「もう帰るの？」

「うん、妹が風邪ひいてしもて」

「もうちょっと待ってくれたら、一緒に帰れるけど…」

「ごめん、妹が心配やから」

「妹さんそんなに具合悪いの？家に誰もいないとか？」

「…いや、熱もあらへんし、ばあちゃんはおるけど…」

「だったらそんなに急がなくても…」

「ごめん」

顔は笑っていたが強い口調で西夜は両手を合わせた。

「今日は早う帰りたいんや」

パタパタと走り去る西夜を見送り、残念そうにさなえは首をかしげる。

「あゝあ、フラれちゃったあ」

イヤミな口調に、てっきり西夜のファンからの陰口かと思って怒りつつ振り返ったそこにいたのは。

「なんてね」

「なんだメグかあ」

恵だった。

「ちようどいいや、ちよつと来てよ」

「？どこに？」

「いいところ」

「ち、ちよつと痛いってメグ！自分で歩けるから！」

引っ張ってこられたのは人が滅多に來ない裏庭だった。さなえは

地面に投げ出されるように叩き付けられる。

「な、何？」

顔と手の甲、それから膝と太ももに擦り傷を負いながら、かろうじて目を開けた。

「こっちが聞きたいわよ」

恵はいつもの気の弱そうな顔立ちではなかった。蔑み睨むような視線。

「裏切り者」

「な…何のこと？」

「トボけないでよ！水吹くんの好きな人って、さなえなんですよ！初めから知ってて二人で笑ってたんですよ！」

さなえはその言葉で事態を察した。

「違う！」

やっぱり見られていたんだ。

「そんなことしてない！」

「嘘っ！」

言うとは恵はスカートのポケットからカッターナイフを取り出した。その刃が一閃したのは、さなえの長い髪。

『あれ？髪下ろしてるやん』

パラパラとこぼれ落ちる髪の欠片。

『そっちの方が可愛いで』

「い」

『か、可愛いとか簡単に言わない方がいいわよ！』

「いやあああああああああ！」

「さ、さなえが悪いのよ。教えなさいよ『秘密』を」

「え？」

「あんたのことだから、どうせ秘密握ってお情けでつき合ってもらってるんですよ」

何言ってるの？メグ？

『水吹くんてカッコいいよね〜』

そんなの私の知ってるメグじゃないよ

『聞いてさなえ！水吹くんに名前覚えられてた！』

いつもの優しいメグじゃないよ

『水吹くんに告ろうと思うんだけど、ついて来てくれる？』

ねえ…メグ

『好きです！』

なんでそんなに悲しそうな顔してるの？

「秘密…水吹くんの特技…」

もういいよ

もうやめよう

水吹くん

メグ

ごめんなさい

ごめんなさい

ごめんなさい

第零章「ヒミツ」(6)

「水吹って一年の関西弁の？」

突然通りすがりの男子生徒の声が二人の耳に届いた。

「あぁなんか校門にすっげー車が乗り付けてんだよ」

「見に行こーぜ」

「何でも京都から迎えに来たとか」

「嫌や！約束がちゃうやろ！どういいうつもりや！学校にまで来るなんて！」

「大叔父様が亡くなられたのです」

黒服の男数人が黒塗りの高級車の後部座席に西夜を押し込めようとする。

「こないだは又従兄で、その前は曾々爺さんやったやんか！」

「でもこの大勢の前では貴方の能力も使えないでしょう？」

「………！」

「ちょっと通してください」

校門の前に出来た人だかりをかき分けて、さなえは一番前に入る。不揃いな髪もこの騒ぎの中では些少なことからしく、誰も気にしない。

「さあ、西夜さま！」

「水吹くん！」

その声に西夜は振り返った。

「ごめん！今から私、秘密破る！」

さなえは返事は聞かなかった。

「動物と話できるんでしょ！操れるんでしょ！使っちゃえ！その特技！」

啞然とする一同の中でためらった後、西夜は笑った。

「…うん」

西夜のきれいな指が黒服の男達を指差し

「行って」

途端に周りから野良犬が集まって男達に噛みついてきた。

「うわっ！」

「誰か！保健の先生呼んだけて！」

それだけ言い残すと西夜は駆け出した。

その後ろ姿が見えなくなると、さなえはふう、と息をつく。

「あなた！」

「？」

肩に手を置かれた。

「し、島村先輩！」

そこにいたのは校内随一の美女と名高い三年の先輩だった。

「あなたも早く逃げないと質問攻めに遭うわよ！」

「は、はい！」

手を引かれて走った。

第零章「ヒミツ」(7)

着いたのは学校からほど近い公園だった。走り疲れたさなえはベンチに座る。

「ありがとうございました」

「髪」

「え？」

「それ、誰かに切られたんでしょ？」

不揃いなさなえの髪を撫でる。

「揃えてあげる。その代わり何があったか聞いていい？」

「助かります。けどできるんですか？」

「これでも美容師志望でね、家族とか友達とか結構切ってるのよ」
言うど首にタオルを巻いて鞆の中からハサミを取り出した。

「……そうですね。いろんなことがありました。最初は……」

秘密はもう秘密じゃない

私は数十分の間に長い長い話をした

水吹くんのこと

メグのこと

私のこと

島村先輩は

ただ聞いてくれていた

「指をむすびて「マリヤさま

ゆめゆめうそはいひませぬ」

おさなききみはかくいひて

涙うかべぬ。しみじみと

雨はふたりのうへにふる

またスノウドロップの花びらに。」

島村は器用にハサミを動かしながら鼻歌を唄うように呟いた。

「? なんですか、それ?」

「竹久夢二の『ゆびきり』って詩。なんかあなたの話聞いてたらしい出しちゃった」

「それって…」

「こんなものなのかな? 短いものなかなか似合ってるわよ」

タオルを取り、制服に着いた毛を払うと、島村は鏡を差し出した。「水吹くんにフラれた私が言うのも変だけど、あなたは悪くないわよ。もちろんそのメグ…って子も責められないけど。今日のだって水吹くんは助かったと思ってるはずよ」

鏡で短くなった髪を見て自然と涙がこぼれ落ちた。

どうしてこの人は

痛いはずの傷を

笑って話せるんだろう

私も大人になったら

もっと心が大人になったら

こんなふうになれるんだろうか

このことも笑い話に

できるんだろうか

「で、これからあなたはどうしたいの?」

「水吹くんと…メグに謝りたい」

「じゃあすることは簡単ね」

「え?」

「だ、そうよ、水吹くん」

さなえが訊ねるより先に、さなえからは死角になっていた滑り台の陰に話しかけた。おずおずと気まずそうに西夜が出てくる。

「えっと…その…うまく逃げれてよかったよ。どうせ人の噂は…ってね」

「…あ…：水吹くん…：ごめんなさ…」

「ありがとう」

さなえの言葉を遮って西夜は細い肩を強く抱きしめた。

「放して！」

突然の拒絶に西夜は手を離れた。

「そうやって思わせぶりなことしないで！」

「うん…：分かった。ごめんね…」

「うん」

そうやって

君は全部汲み取ってくれる

そんなところが愛おしくて

そんなところが今は憎らしい

「最後にもう一つだけワガママ言っていいい？」

「水吹くんの…：好きな人に会いたい」

「う…：うん」

第零章「ヒミツ」(8)

島村に別れを告げ向かったのは

「え？ここって水吹くんの…」

「うん神社。ついて来て」

西夜に続いて入った境内にいたのは肩より少し上で髪をきれいに切りそろえられた袴姿に端正な顔立ちの少女。

「東子！風邪はもう大丈夫なん？」

問われると静かに頷いた。

「妹さん？」

「うん」

「はじめまして。私西夜くんと同じ学校の…」

「野田さん。東子は生まれつき喋れへんのや」

「え？あ…あ！それであんなに心配を…」

「うん、それもあるけど」

しばらくの間を置いて西夜は微笑んだ。

「東子はウチの一番大切な人やから」

「え？」

「えっと…これは秘密にしてな」

私はそのとき初めて

自分の胸が締めつけられる音を聞いた

水吹くんはずっと

そうやって彼女を護りながら

行きて死んでいくのだろうか

それじゃ水吹くんの幸せは

どこにあるんだろう

水吹くんはどうやったたら

幸せになれるんだろう

「水吹くん」

……ああそうか
だから探してるのか
お城の中のお姫さまより
愛おしく思える人を

「私は約束を破ったからもう水吹くんとはつき合わない。学校でも
挨拶もしないし用事がない限り声もかけない」

探して
探して

でも見つからなくて
こんな結果になっちゃうんだ

「でもこれは私からのお願い」

そんな人いないって
代わりなんかいないって
きつと自分でも
うすうす気付きながら

「どうかどうかお願いだから」

迷子の子どもみたいに

「幸せになって」

西夜の胸元をつかむと、
すがるように声を絞り出した。
「約束！」

もうこれで終わりにするの
これ以上好きにならないために

「ね、約束して！」

泣いてたまるか ひっこめ涙
完全無敵な女の武器を

こんなところで使ったら
丸腰の水吹くんに失礼だ

「今まで本当に楽しかった」

これが私流のケジメのつけ方
「ありがとう」

ちょっとカッコよく終わる権利くらい
私にもまだ残っているでしょう？

そして笑ってすれ違う。

これでいいんだ

ほんの少しお互いに傷は残ったけど
こうして私達は恋をしていくんだ。

第零章「ヒミツ」(9)

石段を下りると島村と、その陰に隠れてバツの悪そうにした恵が待っていた。

「どうだった？」

「え？べつにフツーに」

島村が笑って訊ねるのをすっきりとした笑顔で返した。

「フラれてやりましたよ」

やっぱり、という表情の島村と、驚き目を丸くする恵。

「その…さなえ…」

「メグ、手え出して」

「え？」

戸惑う恵の左手をぐいと引き寄せる。

「これ、本当は明日渡したかったんだけど、水吹くんと私から」

言うど丁寧にラッピングされた手の平大の長方形の箱を恵の手に乗せた。

「開けていい？」

恵の問いに、さなえは笑って頷く。丁寧に濃紺のリボンを解き、白い包装紙の中の箱を空けると、そこにあったのは小さな四葉のクローバーを象った緑のペンダント。

「メグは色が白いから濃い色が似合うって水吹くんが」

島村が恵の手から、そっとペンダントを取り上げ首につけ鏡を差し出す。恵は目にいっぱい涙を溜めながら笑顔を作った。

「誕生日おめでとう、メグ」

だからどうか幸せに

第零章「ヒミツ」(10)

翌年元旦

家の手伝いに駆り出された西夜は、売り子として忙しさのピークを迎えていた。

「次の方どうぞ」

「良縁祈願のお守りを三つ」

「はい、一八〇〇円に……」

そこで初めて客の顔を見て青ざめる。そこにいたのは、晴れ着姿でめかしこんだ、さなえに恵に島村の三人。

「どうされました？」

「『お得意さん』になにかご不満でも？」

「い、いえ」

(よりによって良縁祈願か)と顔にありありと書き記されてるのが見える。

「ようこそお参りくださいました……」

袋に入ったお守りを三人で分けて、同時に笑い出す。

そう、こんな他愛もないことが愛しくて愛しくてたまらないのだ。

そうして春には島村先輩は卒業していった。

その年の夏、私は父の仕事の都合で転校することになった。

水吹くんとは、それ以来一度も連絡は取っていない。

メグによると元気にやっているらしいが、妹さんとうまくいってるというと思う。

あの胸が焦げるような想いも

守られなかった秘密も

心に深くしみた傷も

初めて受けた裏切りも
代わりに知った優しさも

全て懐かしく

愛おしく思える日が
来るのだろうか

これはあまりに稚拙で

誰にも言えない

青春の始まりの秘密の物語

第㊦章「ヒト」(1)

倭は 国の真秀ろば

たたなづく 青垣 山籠れる 倭し麗し

「古事記」中卷・景行記

.....燃える

燃える

燃える

燃える

燃える火

燃える炎

そう例えるならば

それは灼に燃える炎のようなもの

柔らかに暖かに照らすかと思えば

簡単に人を殺す

人がヒトでなくなった最初の証拠

そう

それはまるで

まるで.....

男の目に映るのは煌々と燃える炎と一人の少年。

頬に一筋の汗が伝う。

火災：いや、放火か、火を放った少年は平然と笑う。

一面を囲う本棚から本がなだれ落ちる。

炎に囲まれながらも男は黙って佇む。

逃げ場のない場所。

死に直面しながら、不思議と落ち着いていた。
まるでこうなることを知っていたかのように。
対峙。

少年は静かに微笑む。

何かを訴える男。

それに応え、笑って何かを呟く少年。

その言葉は誰にも聞かれることはない。

ゆっくりと歩みを寄せる少年

手を伸ばす

男に向かって。

冷笑。

男の顔を覆う。

口だけでゆっくりと笑う。

全てを嘲笑うかのように。

それが男の最期だった。

床に倒れる音すらも炎に打ち消される。

間もなく男を吊う炎が彼の骸を覆っていった。

燻る焼跡から出て来る少年。

同時にビルの間をぬって昇る朝日に目を細める。

顔を上げ、穏やかな笑顔を見せた。

透き通る白い肌に横だけ伸ばした茶色の髪と奇妙なほど整った顔だ
ち。

「さあ物語を始めましょう」

まるで……………？

果たして

許されるのか？

あなたは

許されるというのか？

人が

神を

語ることが

第㉔章「ヒト」(2)

「古事記、日本現存最古の書物」

空気は冷たいが木々は確実に春への準備を進めている。

「全三巻の歴史書で成立年は七一二年。奈良時代：元明天皇」
冬独特の澄み渡った高い空。

「伝承や皇室の系図を稗田阿礼が暗誦し、太安万侶が記した」
足早に流れて去っていく雲。

「天皇を中心とした国家樹立政策の一環とされているわ」

下校する人はとうに帰路につき、外から聞こえる歓声も遠い。

「上巻は主に国内における古代の神話を……」

教室の窓枠を伝ってきた風が静かに髪を撫でる。

こんな日は

「おやすみ」

すぱこおん

突然、頭を走った容赦のない痛みに少年は一度閉じた目をゆっくり開いた。

「ハル：痛い……」

「あんたねえ：ケンカ売ってんの？人が貴重な部活時間割いて勉強見てやってるってのに何が『おやすみ』よっ！」

先ほど、少年の頭を殴りつけた凶器：もとい古語辞典を右手に持ったままで怒鳴りつける。二人しかいない放課後の教室に遠慮なく大声が響き渡る。

怒りに頬が紅潮し肩で息をする少女を前によく自分の立場を思い出した少年は自分の頭をよしよし、となでて首をひねった。

「貴重なって：部員がハルだけの歴史研究部……」

「貴重なの！それより質問に答えなさい！」

「………何でって、いい天気だから……」

「………今度は角で殴ってあげようか……」

「痛いからやめとく」

そう言って目を細めると、少年は軽く笑った。怒りに震えていた少女もやれやれ、と息をつく。

「安ー、生きてるかー？」

音を立て、開いた教室の扉から少年二人が顔を出した。

少し背の低い方はバスケット部のユニフォームの上にジャージを着込んでいた。透き通る白い肌に横だけ伸ばした茶色の髪と奇妙なほど整った顔だち。

背の高い方の少年は二月には見るのも寒いノースリーブにハーフパンツのユニフォームを平然と着ている。

「都音君、とね いずみはら泉原君」

天川、と呼ばれた少女？あまかわはるか天川遥歌は華奢な肩と短い黒髪を揺らし、御覧の通り、と少年を指した。

「あ、トネとイズミだ」

安、と呼ばれた少年？おおえやすし太榎安は声の主をやっと認めると手を振った。

「これから古典の再々々試験だっけ？」

「『再』が一つ足りないわ」

短めの黒髪にフレームのない眼鏡。顔を上げた少女は校則通りに着こなしただけの緑のブレザーがあつらえたように似合っている彼女は大きな目で軽く苦笑する。とね かおる都音架織といずみ はらともき泉原智樹は大仰に息をついた。

「バスケット部コンビ、部活は？」

「今から。教室の前通ったらハルさんの絶叫が聞こえたから」

「部長が書類の提出忘れて職員室に呼び出されてね」

「あはは、言うなよ、都音。ウチ歴研と一緒に部員が少なくて一年の俺が部長してるから」

困った笑顔で泉原智樹は都音架織の肩をポンポン、と叩く。

「あ、学年末の？あたしも出しとかなきゃ」

「おや、しっかり者の歴研部長が珍しいですね」

「都音君、同級生になって一年経つんだからいい加減その敬語やめない？」

いささかムツとしながら、遥歌は架織に言った。

「すいません、ついクセで」

架織は悪びれもせず軽く頭を下げる。

「皆さんの中で一番、誕生日遅いから年下ってことでご勘弁願えませんか？」

「え？トネって俺より遅いの？俺、三月十九日だよ」

「勝ちました。三月二十一日です」

一体何に勝ったのか、架織は指を振る。

智樹がふと机の上のプリントに目をやった。

「古事記？」

「読解がさっぱりだから文学史だけでも叩き込もうと思って」

「もうすぐ二年だったのに進級できるのかね」

「そのための再試験でしょ。それに…」

安に冷たい視線を向け、ニヤリと笑った。

「いいじゃない『天川先輩』って呼ばれるのも」

「ああいいねえ『泉原先輩』」

「ち、ちよつとハル：イズミ…」

「お二人ともひどいです！」

泣きそうな安をからかう遥歌と智樹に、架織が割って入った。

「トネ！」

天の助けと言わんばかりに、架織に泣きつく安。

「本当のことを言われたら誰だって傷つきますよ！」

その口から発されたのは追い打ちだった。血を吐きそうなダメーシを受け、安はよろめいた。

「確かに幼なじみとはいえ、学校一の才媛に太榎さんごときの専属講師はもったいなさすぎですが…」

さらなる追い打ちを架織はかけ続ける。

「あら」

遥歌は目を丸くした。

「そちらこそ、この前の模試の英語、あたしを抜いて全国トップだったじゃない」

「いえいえ、英語だけですよ、天川さんに敵うのは。天川さんこそ古事記の論文、また賞もらったみたいですよ。賞状が職員室に届いてました」

「あら、そう」

慣れた様子で、遥歌は笑う。

「大学生や大人に混ざって、よくやりますねえ」

二人は同時に乾いた笑いを発する。

「怖いんですけど、あの空気」

「俺らには分からない世界だな、社交界か？」

遥歌と架織を包む禍々しい空気と作り笑いに安と智樹は数歩後ずさった。

「『成績』上流階級の空気か…」

コンコン

不意に空け放しだった教室の扉をノックする音が聞こえた。

「旗右先輩！」

声をあげたのは遥歌だった。

迷惑そうな顔を何一つ隠すことなく佇んでいたのは長身の青年。

色白でがっしりというより、ひよろりという雰囲気似合う。白い肌明らかに校則違反の束ねた長めの黒髪が映え、眼鏡の奥で切れ長の瞳が冷たく燦る。かたく結ばれた口元。制服は安たちのもと同じ配色なのに着崩されたせいではいふんと印象が違う。両手はこれも校則違反の皮手袋で覆われていた。

「ごめんなさい！呼び出した時間過ぎてましたね！安、プリントやっとおいて」

遥歌が間髪いれずに立ち上がる。慌てて鞆から小さな封筒を取り出して、彼の方に向かった。

「弘栄高校の誇る天才が三人そろい踏みか」

智樹は息をつく。

旗右栄^{きゆうさかえ}は理系の模試では、ほとんど全国トップを独走している。文系の天川、理系の旗右、文武両道の都音と、校内では知らない者はいなかった。実際、この三人のおかげで、そう偏差値の高くなかった弘栄高校の受験倍率は跳ね上がっていた。

「安、古事記の成立年は？」

「え、えっと…一七二年！」

「何時代よ、それ！七十二年！もう追試はやめてよ！」
言うと言歌は栄とドアの前から消えていった。

第㉔章「ヒト」(3)

「天川さんって…旗右先輩と仲いいの？」

遥歌が立ち去って取り残された教室で、智樹が呆然と安に問いかけた。

「うん、仲いいっていうか、何か気が合うみたい」

「でも旗右先輩って頭いいから有名だけど、怖いじゃん。俺、あの人が人と話してるの見たことないぜ」

「俺だって最初聞いた時は信じられなかったよ。頭いい同士、話しかうんでしょ。つき合ってるんじゃないの？」

安は関心のないふうに問題集やらの散らばった机に頭を預ける

「お前、それマジで言ってる？」

「え…うん？」

「頭いいだけなら都音の方がまだマシだろうが」

「…ちよっと…マシって…これでも人よりはモテるんですよ」

安は遥歌のことを「ハル」と呼ぶ。家が近所でいつも二人でいるため、校内では公認のカップル扱いだが、お互いをよく知る智樹には保護者と子供にしか映らなかった。事実、本人たち…：少なくとも安にとっては遥歌は保護者でしかないだろう。

(それはないと思うが…) 智樹は言葉を呑み込んだ。

「ま、事情は人それぞれってね」

一人ごちたため息をつく智樹に安は不思議そうに首をかしげた。

第壹章「ヒト」(4)

教室から一番近い階段の踊り場。冷える外気に手を温めながら遥歌はペコリ、とおざなりに頭を下げた。

「すみません、先輩。三年生のホームルームもつと長引くかと思つてて」

「別に」

謝られていることなどまるで気にせずに、青年は低いが綺麗な声で返す。

間髪いれずに遥歌の前に大きな茶封筒が差し出された。封筒と頭一つ高い栄の顔を交互に見比べてから、それを受け取る。

中に書類の束が入っているのを確認して、ほう、と息をついた。

「……確かに頼んだのはあたしですけど、よく手に入りましたね。

宮内庁の収蔵品一覧なんて」

皮肉げな口調だが、感心や疑問よりも好奇心が先立って目は輝いている。

栄は漆黒の目を訝しげにひそめる。

「助かります。今書いてる論文の資料に欲しかったんです。そうそう忘れるところだった。これ、この間の資料のお礼です。論述大会の副賞ですけど」

遥歌は事もなげに普通サイズの少し厚みのある茶封筒を渡した。

(お前ら学校で堂々と大枚のやり取りすんなよ) 通りすがりの男子生徒が、見ない振りをして気まずい空気に走り去った。

「ああ、助かる。これで家賃が払える」

「相変わらずですねえ、プログラムでバリバリ稼いでるのに何にそんなに使うんです？」

「関係ないだろう」

「ええ」

尋ねられた方は何も言わずに封筒を無造作に内ポケットに押し込

む。尋ねた側も返事は最初から求めていなかったのだろう。栄が何も言っていないうちに話題を変えた。

「そう言えば先輩、結構、噂になってますよ」

遥歌は上目遣いにクスクスと笑って言う。

「全国トップ何度もとっておいて、大学どころか就職もしなかったでしょ？みんな不思議がってるんですよ。あたしが聞いただけでもヤクザの跡取りだとか、病気で余命いくばくもないとか。物理の河合先生なんて、まだ遅くないって推薦状抱えて待ってますよ。もう卒業まで一か月もないのにね」

「……暇な奴らだ」

吐き捨てるように呟く。

「天川！」

二人の間に割って入ったのは件の河合教諭だった。栄はビクリと肩を震わせる。

「あ、先生。旗右先輩ならここに……」

「あっさり売るな、天川」

ボヤク栄を他所に、河合教諭はいつもと違いいやに慌てた様子だった。

「いや、今日は旗右じゃないんだ。お前のクラスの太榎安はまだ帰ってないか？」

「え、ええ……まだ教室に……何かあったんですか？」

教諭は踵を返して一年の教室のある階に向かいながら叫ぶように言った。

「

」

そうだ、いい天気

いい天気だった

その日は抜けるような冬晴れで

教室に駆け込む。

架織の指導の元で文学史のプリントに書き込んでいると教室の扉が開いた。顔を上げると遥歌が真っ赤な顔で息を切らせている。

「やす……し……」

もともと体力のない遥歌が全力で走って来たのだろう、ぜえぜえと肩で息をしながら途切れ途切れに喋る。

「……たい……へん……おじさ……が……万夫……おじさんが……」
ひろお

「落ち着いてよ、ハル。父さんがどうしたって？」

顔を上げると遥歌は今にも泣きそうな顔をしていた。

「大学の……図書館が……昨日の夜……火事になって……」
遥歌の目から大粒の涙がこぼれ落ちる。

「……亡く……なったって……」

遥歌はその場に崩れ落ちた。

父さんは確かに大学の文学部で教授をしている。

だが、死んだ？

父さんが死んだ？

停止しそうになる頭を必死で巡らす。

出て来た答えは。

いつも通りにいい天気で

こんな日にあたしたちの運命が

塗り替えられたなんて

「……………エイプリルフル？」

ガスッ

「さぁどうぞお連れください。そして今は二月だとかいつに教えてやってください」

後頭部殴打により伸びてる安の首根っこを捕まえ、差し出しながら遥歌は言った。

「……ああ」

透き通る白い肌に横だけ伸ばした茶色の髪と奇妙なほど整った顔

だち。誰も見ていないところで、架織はクスリと笑った。

そのときまで考えもしなかった

ヒトの与り知らぬところで

運命は少しずつ違う色に染められていく

それに気づかなかっただけだなんて

遥歌と泉原は、安を乗せた教諭の車を見送る。

その瞬間まで考えもしなかったんだ

第壹章「ヒト」(5)

『今日未明、東京都の私立湊大学付属図書館で発見された遺体は同大学文学部教授の太榎万夫さんおえいひろお五三歳のもものと判明しました。警察は殺人の可能性も視野に入れ、死因を調査中です』

架織が携帯のニュースサイトを読み上げ、遥歌と智樹、架織はうつむいた。

「なんか変な気分ですよ、これが太榎さんの父親だなんて」
架織の呟きに押し黙っていた遥歌が口を開いた。

「安ってお父さんと二人暮らしだったのに、これからどうするんだろう。いなくなったりしないよね。大丈夫だよ」

立ち止まる遥歌の頭を智樹は軽くなでた。

「大丈夫だよ」

それは根拠のない言葉。

「え？火事じゃないんですか？…でも…」

警察署で難しそうな顔をした刑事二人に俺は何ともおぼつかない話をしていた。

「便宜上そう伝えるしかなかったんだ。それは謝る。太榎君は人体自然発火っていうのは知ってるかい？」

「あ、なんかミステリー番組で見たような…全身真っ黒焦げになるんですよ？なにに周りに焼け跡がないっていう…」

「そう、よく知ってるね。今回のお父さんの事件はそれとしか思えないんだ。だから死体も見せなかった。こんな言い方したくはないが、相当気味の悪い物なのでね。希望とあらば写真を見せるが…」

「えっと…遠慮します…」

「骨格から判断された年齢と性別、歯の治療痕などと、今、居場所の分からない大学図書館に自由にできる人間という条件で、太榎万

夫さんだと判断させてもらった。それからさっきの太榎君の言葉も根拠になる」

「はあ。確かに父は昨日帰宅しませんでした。さっきも言いましたが、大学にこもりつきりで普段から滅多に帰って来なかったので」

「ああ。原因が分からないから調査のために葬儀は少し待ってもらうことになるが：それより太榎君はお母さんと暮らしていないようだが親戚のあてとかはあるのかい？」

小太りの刑事が尋ねる。俺は少し困ったように笑った。

「大丈夫ですよ」

なんて根拠のない言葉。

第㉔章「ヒト」(6)

警察署から帰る道で安はかなりの数の着信履歴に気がついた。

(○六：大阪からか) 大阪の叔母だろう。あたりをつけて返信をした。

「もしもし、加奈叔母さんですか？ はい、安です。……いえ今帰ってる途中で……はい明日、祝日なのでソチラに伺おうと思ってるので……よろしくお願いします。駿^{しゅん}さんにも、よろしくお伝えください。それじゃ」

電話を切ると叔母の加奈は大きく息をついた。

思い出されるのはまだ自分があどけなかった頃の兄の……万夫の記憶。確か祖父の葬儀の帰りだった。

「加奈」

学生服の万夫は加奈の手を引きながら思い出したように笑った。

「お前にだけいいことを教えてやるよ。どんなことでも叶えてやるから言ってごらん。ほら、ほら、言っごらん」

さあ集え

ヒトの形をした

化け物たちよ

離さぬように

もがかぬように

この道に集うがいい

第㉔章「ヒト」(7)

「新大阪、新大阪でございます。お降りのお客様は…」

朝一番に乗り込んだ新幹線に三時間近く揺られ、着いたホームに叔母が待っていた。

「お久しぶりです叔母さん。すみません迎えに来てもらっちゃって」
久々に会った叔母は随分老け込んだ気がした。父・万夫の妹である叔母は数年前に夫を病気で亡くし、華道や茶道の講師をして息子を？安から見れば従弟を？育てていた。会うのは、その夫の葬儀以来だろうか

「…ええ」

目を合わせずに、それ以上は何も言わない。

距離をおいて歩く。

それはまるで何かを恐れるように。

大丈夫、俺はやっていける。

大丈夫

大丈夫

大丈夫

呪文のように唱え続ける

今までもこれから

「どーせ安のことだから、ご飯もメンドくさがって食べてないだろうし」

卵焼きときんぴら以外は冷凍食品の弁当が入った袋を提げ、ゆっくり歩いても五分くらいの道を遥歌は進んでいた。

久々に来た安の家のインターホンを鳴らす。しばらく待っても返事がないので、寝てるのかと二、三度続けて鳴らしていると、隣の家

から壮年の女性が顔を出した。

「安くんなら、朝早くに出かけましたよ」

「え？」

「なんでも大阪の親戚の家に行くとか…」

遥歌の手から紙袋がこぼれ落ちる。

第㉔章「ヒト」(8)

新大阪駅から車で三〇分ほどで叔母の家に着いた。

玄関先で出迎えたのは安より頭一つ分背の高い青年。確かこの春大学を卒業するはずだ。

「ただいま、駿」

「お邪魔します、駿さん」

太榎の家系の濃い茶の髪を揺らしながら。

「どうぞ『化け物』さん」

「え？」

安は耳を疑い振り返る。笑顔を決やさず、駿は続ける。

「せっかく女手一つで育ててくれた母から自立して楽させてあげられると思ったのに、とんだ災難だよ。化け物じゃなくて疫病神かな」
悪意を隠そうともしない突き刺さる言葉。

「駿！」

加奈が声を上げる。

「母さんは弱腰すぎるんだ何も知らない化け物なんて怖がることない」

「その…化け物って…」

安の言葉は無視し、続ける。

「安くん、君、母親生きてるんだよね。そっちを頼るべきなんじゃない？」

パンッ

玄関に頬を叩く音が響き渡る。

「黙れ。お前が母さんのことを語るな」

「すぐに手が出るのは誰に似たのかな？」

ケラケラと笑いながら駿は赤くなった頬を押さえた。

「何が…分かる…?…」

「ち、ちよっと二人ともやめなさい！」

加奈が間に割り入った。

「駿、言い過ぎよ！安くんはお父さんを亡くしたばかりなのよ。とにかく今日はゆっくりしてもらって、これからのことは明日話し合いましょう」

駿は軽く舌打ちして踵を返す。

「すみません。ありがとうございます」

安はニツコリと無邪気な笑顔を見せた。

「え…ええ…」

その笑顔にビクリと肩を震わせ青ざめたのを安は見逃さなかった。

昼前の体育館。

休日部活動中の弘英高校男子バスケットボール部員は順々にシュートの練習をしていた。突然、軽快な音楽が響き渡る。智樹は反射的に振り返る。

「すみません、僕のです！」

そう言って、軽く頭を下げた。

透き通る白い肌に横だけ伸ばした茶色の髪と奇妙なほど整った顔だち。都音架織だ。

「電源切つとけ…ってお前そんなストラップつけてたっけ？」

架織の携帯電話に吊り下げられた丸いフェルト製の小さな人形を見て泉原は尋ねる。

「あ、昨日からつけてるんです」

「手作りだろ？彼女かあ？」

一同は冷やかしの声を上げた。

誰も、まだ知らない。

この後、彼が引き紡ぐ物語を。

日射しのぬくもりを打ち破る寒風が音もなく通り過ぎて行った。
「それより寒くね？ドア閉めよう…あ」

部員の一人が体育館の入口に手をかけ重い扉を閉めようとして、目の前をちらつく白い粒に気づいた。

「雪だ」

さあ集え

「ゆき：雪ですね」

和服姿の女性が長い黒髪をかきあげながら言った。

「大阪でも降っているのでしょうか」

そして尋ねた。

「栄」

聞かれた長髪の青年は答える代わりに黒革の手袋で顎をかいた。

「分かりかねます。氣象予報士の資格は持っていませんので」

真顔の返答に女性はクスクスと笑った。

さあ集え

白く瞬く雪が、君との淀みも洗い流してくれるのだろうか
遥歌は手で受け止めては溶けて行く雪に涙をこらえた。

ただ ひたすらに

降りてくる 雪が

君が 今は 憎い

第㉔章「ヒト」(9)

テーブルに夕飯が並ぶ。

「いっただきまーす！つてあれ？遙歌は」

「論文書くからご飯いらないって」

「またあ？」

遙歌の姉と母親は呆れ気味に笑った。

「あゝ相変わらずオタクだねえ、ウチの妹は」

「唯一のシュミなんだから、そっとしておいてあげなさい」

「だってオタクじゃない！しかも古典オタク！恥ずかしくて友達にも言えないわよ！」

姉は箸をくわえながら言った。

「でも遙歌って論文の賞金どうしてるんだろ。使っても貯金してないみたいなのに：まさか男に貢いだりしてないわよねえ」

当たらずしも遠からずの憶測。

「クシヤン」

栄は鼻をすすった。

「風邪：か。病院も薬も高くつくし：ビタミンC：蜜柑でも買っていくか」

その日は月が高かった。

「あ……」

これでもう何回目だろうか。折れたシャープペンの芯をぼんやりと見つめ遙歌は手を止めた。

レポート用紙を投げ出してベッドに沈む。ぼやけた視界に天井の模様だけが映る。

(……………だめだなあ、あたし)

疲れているのだ、と思う。いろんな意味で。

こんな時すぐに自問自答を始めてしまう癖が大嫌いだった。

何か気を紛らわせないか、と仰向けに寝転んだままで届く本棚に手を伸ばす。手がつかんだのは、何てことのない中学に入る頃には既に読み古していた古代文学の入門書だった。

心の中でため息をつきながらも、とりあえずページをめくる。今となつては自分の名前や誕生日のように暗誦できる用語や年代の数々が目に映っては通り過ぎて行く。

ふとある項で手が止まった。細い指がひとつの人名をなぞる。まだ小学生の頃だったとは思うが、初めてこの名前を見た時には不思議でたまらなかったものだ。安と二文字同じと言うだけのことが、軽く笑って本を置く。

「古事記の編者……太安万侶、か」

誰にも聞かれない声が消えると共に、浅い眠りに誘われた。

「つてあたしが何で安のこととこんなに気をもまなきゃならないのよ！」

「何でウチの妹は論文書くのに奇声あげるの？」

ハンバーグを口にしながら、ダイニングの向かいにある遥歌の部屋に目をやった。

「さあねえ」

母親も心配げにサラダにマヨネーズをかけた。

第㊦章「ヒト」(10)

何もない空間。

真っ白な空間。

辺りを見渡すと、人影があつた。

「父さん！」

父親の姿は踵を返し遠ざかろうとする。

「待って」

慌てて服の裾をつかんだ。

「放せ！」

万夫が叫ぶ。

「化け物が！」

振り払われた手を見つめた瞬間

目が覚めた。

『化け物が』

夢か

そうだな

夢でも父さん

ようやく貴方に会えた

大丈夫

大丈夫

布団の中にうずくまって唱え続ける。

落ち着くと客間の隣のリビングから何か話している声がした。

「やっぱり一緒に暮らすなんて無理よ」

少し抑えた声の相手は駿だろう。

「あの兄さんの子供だって…あの呪われた能力を持っているだけで
気味が悪いのに」

呪われた能力？

「あの子自分の父親が死んだのに悲しそうな顔一つせず笑ってるな
んて」

泣けばよかったのですか？

地に這いつくばって

涙が涸れるまで

泣いてわめけばよかったのですか？

俺は化け物なのですか？

例えばマンガやゲームの怪物だって

きっと自分が怪物だなんて思って生きてない

そんな風に

自分が気づいてないだけで

ヒトから見れば

俺は醜い化け物に見えるのだろうか

自分では分からないから

いつも人と比べて周りを見て

化け物になっていないと

その度安堵する

昼は肩寄せ合って

明るい方へ明るい方へと飛びたがるクセに

夜闇の中でしか心は安らげない

それはきつと

化け物であるかもしれない
自分の姿を隠すため

暗闇の中

この醜い姿を見ないでと叫ぶ
それは炎の灯りを知らなかった頃に
人がヒトであった頃に

神が人にかけた
呪いのように
見えはしないか？

第貳章「ハジマリ」(1)

君が往き 日長くなりぬ 造木の

迎へを行かむ 待つには待たじ

「古事記」下巻・允恭記

どこで何を間違えたのか考えてみる

母さんがいなくなってから俺と父さんはずっと二人で暮らして来たが、実際は父さんと話したことはおろか、顔を合わせたこともほとんどない。

「仕事が忙しい人だから」そう言って周りが世話を焼いてくれたので、さほど気にしなかった。父さんが俺を避けてることなど、その日まで考えもしなかった。

「にちようさんかん？」

それは小学一年の父の日を間近に迎えた頃のこと『日曜参観のお知らせ』と書かれた保護者向けプリントを渡された。

「安くんはいつもの参観日はお父さんが来られないけど、今回は来てもらえるといいわね」

優しい声で教諭が言った。

「来てくれるかな」

「きつとね。ちゃんとプリント見せるのよ」

それは本当に他愛もないことだけど、俺にとっては魔法のようで、全ての救いになるように思えたんだ。

「おかえりなさい！」

リビングのソファに座ってテレビを見ていると、時計は十一時を回っていた。

「まだ起きていたのか。早く寝ろ」

万夫はネクタイを外しながら無愛想に言う。

「あ…あの…これ」

プリントを差し出した。

「日曜参観？ くだらん」

「その…日曜なら…大学も休みだから」

「日曜は毎週研修会だ。分かっているだろう」

「で…でも一日くらい…」

救いは

「ねえ父さん……」

あると

シャツの裾をつかんだ。

「放せ、化け物が！」

その途端、小さな手は振り払われる。青ざめた険しい父親の表情が目に入った。

今思えばなんて滑稽なんだろう

父さんの目には

俺が化け物にしか見えていないなら
化け物が学校のプリントを持って

「日曜参観に来てください」なんて

どんなに滑稽な絵なんだろう

一瞬で打ちくだされた救いや希望を

俺はまだ拾い集めようとしている

そんなもの最初からなかったとは考えないように

俺は まだあがこうとしている

第貳章「ハジマリ」(2)

「おはようございます」

わざと遅めに起きた安に、叔母は台所で振り返らず頷いた。

「駿さんは大学ですか？」

「ええ、夕方まで帰らないって」

心の中で胸を撫で下ろした。

「俺、散歩してきます。食事はいりませんので」

「そう」

息が、つまる

「みんなニュースなどで知っているとと思うが、昨日、太榎のお父さんが亡くなった。しばらく学校も休むそうだ」

教諭が出席簿を見ながら言うのを聞いて、遥歌の前の席の女子が振り返った。

「天川さん、太榎くんってやっぱり転校するの？」

「多分ね」

「えー！ヤダー！太榎くんってなんか可愛いじゃん。結構好きだったのになあ」

「ウソー！やめてよー！島村さんみたいにきれいな人が」

息が、つまる

コンビニで朝食のパンとジュースを買って公園のベンチに座っていた。するとカラスが安の足下で止まって物欲しげに見つめて来た。安がメロンパンのかけらをあげると、おいしそうに食べる。よく慣れてるなあと感心しつつ安は目を閉じた。

大丈夫

今までもそうして来たんだ

不安はないわけじゃないけど

俺は一人でもやっていける

第貳章「ハジマリ」(3)

五時限目の予鈴が響いた。慌てて教室へ戻る人の声を背に遥歌はぼんやりとホットコーヒーの缶を眺めていた。人気のない校舎の片隅。自販機コーナーのベンチに浅く腰かけ立ち上がろうともしない。(何も知らないことなんて分かってつもりなのになあ……) できることなら何も知らないことすらも知らないままでいたかった。

淋しいよりも辛い。
辛いよりも苦しい。
苦しいよりも……。

ガンッ

スチール缶を落として革靴の踵で踏み付けた。まだ残っていた中身が溢れだし小さな水溜まりを作る。

「……………悔しい」

口の奥で呟く。

どうすればいい？

私はどうすればいい？

分からない。

考えがまとまってくれない。

どうすれば……………

その時だった。

「馬鹿か？わざわざ買ったものを潰して」

聞き慣れた声に顔をあげる。いつからいたのだろうか。校舎の通用品に立っていた『彼』は遥歌と目が合うのを待たずに自販機の前に行き、小銭を何枚か入れた。ブレザーの上からコートを羽織り、しかし、その動かない表情には寒さなど微塵も感じさせない。

遥歌はようやく声を出した。

「……旗右先輩」

遥歌の声に応えず栄は紙コップに注がれるブラックコーヒーを眺めていた。

沈黙に耐えかねて遥歌は口を開く。

「今日は三年生は卒業式の予行でしたっけ？もう終わったんですか？」

特に答えず、カップを取り出す。

（サボりか…）

「珍しいですね。先輩が飲み物買う所なんて見たの二度目かな…」

「さあな」

いつもなら気にならない普段と変わらない沈黙が痛い。

チャイムが鳴る。栄はゆっくり顔を上げ、校舎の方を見た。

「いいのか？」

「いいんです、別に」

苛立つ遥歌の答えにも栄はそうか、と呟くだけだった。

「…先輩っていつも『ああ』とか『そうか』とかしか言いませんよね」

「そうか」

少しだけ、腹が立った。何に、かは分からないが、とにかくイライラした。

「いつだって、そう。先輩『も』そうやって自分は関係ないって…」
やめろ、こんなのただの八つ当たりだ。

「きっと…何があったって平気な顔してる」
みっともない。

こんなのただの……………。

「太榎…安か」

胸を突かれ顔を上げた。

「知ってたんですか？」

「さあな」

赤い自販機にもたれてコーヒーを一口だけ飲む。遥歌は自嘲気味に口だけで笑った。

「カッコ悪いなあ、あたし」

何にも出来ないことなんて分かってたつもりなのに。

「安の面倒見てるようなフリしてて、ねえ」

栄の顔は見なかった。きっといつも通りの顔で黙って立っているだけだから。

「悪いが、何を言っているのかよく分からない」

「だから……!!」

栄のカップがゴミ箱に投げ捨てられた。

「話したいのなら、勝手に話せ。終わるまで、私はここにいる。必要なら相槌くらいは打ってやる」

彼は立っていてくれるだけだから。

「……そういう所がズルいんですよ、先輩は」

「邪魔ならそう言え。私も早く帰りたい」

ガシッ

座ったまま栄のコートの裾を固くつかんだ。

「褒めたんですよ、今のは」

久しぶりに遥歌は顔を上げて笑った。気がした。

第貳章「ハジマリ」(4)

風が冷たかった。

痛いほど冷たかった。

「小学校上がった頃から一緒だったんですよ。あたしが安の近所に引っ越して来てから、ずっと。あいつ、昔頃からトロくてね。何したって最後だったからお目付役みたいにされてたんですよ。離れるなんて考えなかった。こんなに急にいなくなるなんて思ってもみなかった」

いつだって一緒にいるべきだと思ってた。

「だから…何か分からないですよ。いなくなったことが淋しいのか…」

栄は黙ってただ聞いていてくれた。

「安にとつてあたしなんかなくても平気だったってことが悔しいのか」

どうして何も言ってくれなかったのか。事情があったとしても一言くらい言ってくれてもよかったのに。

「大体いっつも、優しいフリしてるばかりで自分勝手でわがままで、人のことなんてなーんにも考えてない。千二百円貸したまんまだし、本当なら来週英語の追試受けなきゃ進級できなかったはずだったし、言いたいことだっていっぱい………」

いっぱいあったのに。

「…それで、貴様はどうしたい？」

「え？」

聞き返したが栄は答えなかった。

「……」

「ただ後悔しているのは結構楽だろう？」

低い声。

彼の声はいつだって手短に真実だけを告げる。

「そんなこと……分かって……ます……よ」
分かってる。分かっているんだけど……。

「……怖い」

安に会うのが怖い。

会って迷惑をかけるのが怖い。

会ってこれ以上拒絶されるのが怖い。

淋しいよりも悔しいよりも先にあった感情。

こんなんじゃ、あたしたただの憶病者だ。

遥歌はうつむき、グツと目を閉じた。

泣くものか。

こんなことで泣くものか。

こんなことくらいで泣くものか。

堪えた瞳からそれでも溢れ出す雫が膝に落ちる。

「もう一度聞く。それで、貴様はどうしたい？」

「……安に……会いたい」

何かに蹴られたように大粒の涙がとめどなくこぼれ落ちる。栄はただ黙って立っていた。

会いたい

「……会いたい……よお……」

会って何がしたいわけでも、言いたいわけでもない。

顔が見たい。

声が聞きたい。

バカみたいだ。そんなバカみたいなこと

あたし、恋をしているみたいじゃない。

「なら会いに行けばいい」

簡単に言ってくれる。いつも通りの無表情な言葉が、悲しそうに聞こえたのは気のせいだろうか。

「…先輩っ…女の子が泣いてる時は…コートでも…かけるかハンカチでも差し出す…のが礼儀ってものでしょ…」

しゃくり上げながら言う遥歌に栄は目もただけで呆れた顔をする。

「お前……何様だ？」

眼鏡を押し上げながら言い、それでもそこに立っていた。それだけで十分だった。

いつの間にか嗚咽は笑い声に変わり、いつまでも赤い目で遥歌は声を上げて笑っていた。

あたし、恋をしているみたいじゃない。

第貳章「ハジマリ」(5)

「ここでXの二乗を…」

ガラッ

授業の途中で派手な音を立て教室の引き戸が開いた。

「あ：天川、保健室にでも行ってたか？」

優等生のおかげで信頼は厚く、教諭はサボッていたとは言わなかった。

「そうです。非常に体調が優れないので天川遥歌、早退します」

元気よくキッパリと言い放った遥歌は、すぐさま荷物をまとめると教室を出て行った。

ざわめく教室で智樹とは架織は顔を見合わせクスクスと笑った。

「さすが、それでこそハルさんだ」

どこか羨ましそうに呟く。

「愛されてますねえ、太榎さん」

「見っちゃった。見っちゃったあ」

甲高い声は学校の敷地を仕切るフェンスの向こうから聞こえて来た。

「…何の用だ、砂城^{さぐら}？」

あからさまに不機嫌な様子で敷地外の方へ目をやった。

手を振っているのは他校の制服を来た美女。明るい日差しに金に染めたロングヘアーが揺れる。

「たまたま弘英に寄ったらいいもの見れちゃった。女の子に優しい栄くんなんて初めて」

「何のことだ？」

「ヤダッ、自覚なし？砂城にもあんな優しくしてほしいなー」

笑って言う彼女をまるで動物園の動物を見るような目で一瞥した後、栄は踵を返した。

「ちよつとー！無視しないでよー！」

さあ
集え

第貳章「ハジマリ」(6)

叔母の家に戻った安は玄関を見、駿の靴があるのに気がついた。リビングに入るとソファに駿と叔母が座っていた。安はソファの一人席に座った。

「早かったんですね、駿さん」

怯むな

「話の前に相談があるんです」

笑え

「俺、一人で暮らしちゃいけませんか？」

今のあなたたちには

叔母が目を見開いた。

願ったりのはずだ

「父さんの貯金で今の高校を出るくらいならなんとか…」

「安くん、それはやめた方がいいわ」

「え？」

一番喜ぶと思っていた叔母が安の言葉を遮った。

「じゃあ俺はどうすれば…」

何だ……？

この人

手放したくないのに

近くに置きたくないみたいなの

「やっぱり、この家で暮らして…」

「母さん、一人暮らしさせるべきだよ。どこかこの近くにアパートでも借りて住まわせれば…」

「え？」

相変わらず刺のある口調で言い放った駿の言葉に安は目を丸くした。自分は前の家で暮らし、東京の今の高校を卒業するつもりで言ったのに…。

やっぱりおかしい。

「あの：一つ聞いていいですか？」

安が会話を止めた。

「『呪われた能力』ってなんですか？」

急に二人の顔が凍りつく。

「俺は駿さんや叔母さんの言ってることがよく分かりません」
構わず安は言葉を続ける。

「それってその『能力』ってのに関係あるんでしょうか？ そんな…」
「やめて！」

「母さん！」

パシッ

騒然とした部屋に一音が響き渡る。叔母の手のひらが、安の頬を
ありったけの力で弾いた。

「黙って！ 喋らないで！」

「母さん！」

静止も聞かずに声を荒げる。

「あなたなんて：兄さんを殺した化け物のクセに！」

「母さん！」

「そうよ、私は知ってるわ」

駿に抑えられても言葉を続けた。安は呆然として動けない。

「あなた『たち』が殺したのよ」

憎しみの目が安に向けられる。

「万夫兄さんを」

父さん

「殺したのよ」

俺は化け物なのですか？

「へえ、それはまた興味深い仮説」

座ったまま動けない安を引き戻したのは聞き慣れたよく通る声だ
った。

光が

「論拠を聞かせてもらいましょうか」
よく知ってる声

射した

「なっ！」

「はじめまして、叔母さま。天川遥歌と申します」

安が呆然とする中で制服に学校指定のコートを着た姿のままの遥歌は自信たっぷりに言い放った。鍵空いてましたよ、不用心ですね、と皮肉げに言う。

「太榎安の：十年來のお目付役です」

「ハル！何でここに！」

「姫を連れ戻しに参りました」
やすし

きっぱりと言い放つ。

ちゃんと伸びた背すじ。

自信にあふれた目。

叔母と駿が啞然としている。

「と、いうわけで帰るわよ、安」

新幹線って高いわね、と付け加えて。

「いや…」

口ごもる安の頬を軽くたたいた。

「ウダウダ言わない」

さあ、全力で開き直れ

「あんたはどうしたいの？」

「俺は…：タコもカニも嫌いだなあ…：と」

「うんうん、それでこそ安」

「待って！」

叔母が声を荒げた。

「駄目…。あなたが太榎の目を離れては…」

「何故です？」

「それは…」

「ややなあ、しゃべったったらええのに」

聞いたことのない言葉が安の背後からした。振り返るとリビングの入り口に一人の少年が立っていた。ダッフルコートの下からはタートルネックのセーターが見える。短く切った髪に大きな目が映える相当な美少年。

「安さんの能力が怖いけど、野放しにするのはもつと怖いて」

「水吹さん！あなたいつ大阪に？」

叔母が立ち上がった。

「京都のお母様がどれほど気にしてたか！」

「そないなことより」

「そんなことですって！」

「安さんはウチの家で預かるてのはどない？折衷案として」

満面の笑顔でサラリと言う。

「はあ？」

同時に声を出したのは遥歌と安の方だった。

「ウチの東京の家なら空き部屋もあるし今の高校まで通える。あんたらは要は見張りがほしいんやろ。ならウチが引き受けるで」

「で、でも水吹さんにそんな…」

駿が口を挟む。

「うっさいなあ」

少年はその駿の前に来ると楽しそうな声と顔で言った。

「万夫はんのおらへん太榎家なんていつ滅ぼしてもええんやで☆なんなら就職先に言っつて内定取り消しにしてもろたるか？」

ひいつ、と肩をすくめる。

（何、今の？）青ざめる安にはお構いなしに、くるりと無垢な笑顔で振り返った。

「ほい、万事解決☆帰る準備して」

第貳章「ハジマリ」(7)

「で、水吹君だっけ？」

「西夜でええよ、年下やし。あ、中二：もうすぐ中三ね」
家を出た安たち三人は駅に向かう歩道橋を上っていた。

「で、あなたは何者なワケ？」

うさんくさいものを見る目で遥歌は尋ねる。

「家出少年」

「は？」

「ウチの実家、京都の割と名の通った名家なんやけど、まあそないな家に嫌気がさして家出して、今は妹と東京における親戚の神社に居候しとる」

(やっぱり、うさんくさい) 安はすっかり西夜の話の聞き役になっている。

(そもそもあたしが出て来たのってムダ足じゃないのよっ)

「ハル」

安の声に振り返った。

「来てくれてありがとう」

バカげてる

笑顔がこんなに嬉しいなんて

「嬉しかった」

まるで恋をしてるみたいじゃない

「西夜君、クリームコロッケ作れる？」

「は？」

仕方ないじゃない

「安の好物はクリームコロッケとラーメン。嫌いなのはアスパラとタコの刺身。いつもは十時半に寝るけど、テスト前は最低十二時まで勉強させること。帰宅部だけど補習常習犯だから帰るのは結構遅い。朝が異常に弱いから殴ってでも起こすこと」

今さら気づいちゃったんだから

「少しでも嫌な思いさせたら、どんな手使っても連れ戻すから」
西夜は笑って頷く。

「ウチ、クリームコロッケ作れるから」

（違う！強調するのはそこじゃない！）

「ったく！あたし一人で帰る！」

「へ？」

「帰るの！」

言うと、走って駅の方へ向かいだした。

「？」

残された男二人は訳も分からず見合わせる。

仕方ないので二人でゆっくり歩き出した。

「安くん」

追って来たのだろう。叔母の声に安の肩が震えた。

「叔母さん」

「あなた、絶対に後悔するわよ」

「で…でも叔母さん昨日……」

バサアという羽音が辺り一面に響く。

「後悔なんて何を選んかてするモンやろ。大事なんはその大小や。

それともあなたは安さんが絶対後悔せえへんルールを敷けるん？す

ごいね」

数十羽のカラスが三人を囲むように並んで飛ぶ。

「ひいっ」

叔母が声を上げた。

「いやあ！化け物！」

西夜は安のコートの袖口をつかんだ。

「逃げるで！説明は後で！」

全力で二人は走り出した。

第貳章「ハジマリ」(8)

「あー、脅しに引っかけられてよかった」

「脅し？」

どれくらい走っただろう。一羽のカラスが息を切らせた西夜の肩に乗る。

「そう、こいつは頭はいいけど普通のカラス。やて彼女には十分な脅しやろ」

「まさか朝の…」

「そう、様子見に行かせたんや」

カラスは安に向かってペコリと頭を下げて見せた。

「そしてこれがウチの能力」

「『能力』？」

その一言に反応した。

「そう、ウチの能力はあらゆる動物を自在に操ることができる」
西夜の顔はいつも通りの笑顔だった。

「さて、何から話そか」

第貳章「ハジマリ」(9)

「安さんは古事記って知っとる？」

「聞いたこともない」

ここに遥歌がいたら傷害事件でも起きそうな答え。

「簡単に言えば神話や史実を集めた大昔の歴史書や。編者は太安万侶」

「はあ…」

話が見えない。

「安さん…太榎家はその直系子孫なんや。安万侶には特殊な能力があつて代々受け継がれていた。つまり…安さんは気づいてないけどその力がある」

「西夜みたいな？」

「いや、ウチは古事記に書かれた神の能力を受け継ぐ者の一人にすぎへん」

「すぎへんって…」

「信じる信じないは自由だけど、ウチみたいな能力を持った人は他にも何人もおつて、それぞれに苦しんで生きとる。できれば安に力を貸してほしい」

「力をつて…何かの間違いだよ、西夜。俺はそんな大した人間じゃない」

「そないして自分の価値を決めんという」

父さん、まだあがいてもいいんですか？

救いはあると信じてもいいんですか？

疑うとか 聞きたいこととかより 出て来た言葉は

「……西夜は一体何者なの？」

身を刺すような風が通り過ぎる。西夜は振り返り、静かに微笑む。

「一つだけ、人と違う能力を持ってるだけの……」

明るく、悲しい笑顔。

それは『願い』なのか。

「化け物でも、まして神様でもない、人とは違う能力を持って、人より少しだけ厄介な事情を抱えた…安さんもウチもただの人間やよ、安さん」

ねえ父さん

「もっともウチも強制するつもりはあらへん。安さんが一人で暮らしたいならそれも悪くないと思う。親戚がうっさいなら表向きウチの家におるってことにしてもいいし」

西夜は安の肩をたたいた。

「大丈夫ってもう言わへんでええんやで。大丈夫じゃないときは泣きわめいて助けを求めてかまへん」

迷うな 笑え

「安さんはどうしたい？」

「……『安』でいいよ」

右手を差し出した。西夜の手がそれを握る。

「よろしく、西夜」

さあ集え

第貳章「ハジマリ」(10)

「西夜さんから電話がありましたよ。今東京駅だそうです。太榎安さんを連れて来られると仰っていました」

ほとんど何もない広い和室で座って本を読んでいた袴姿の少女は顔を上げた。

うつろな瞳で何かを考えた後、静かに頷く。

老婆は優しく微笑むと、ゆっくりと頭を下げ、障子を閉めた。

運命を始めよう

はじまりは冬だった。

少しずつ狂い始めた歯車に気付くものはまだいない。

これをずっと後になって

ひどく後悔するものは

いくらでもいたはずなのに。

第参章「イエ」(1)

われと来て遊べや親のない雀

小林一茶

天井を見て

一瞬別の世界かと思っ
た

「……………ああ、そうか」

うつすらと開いた目をこすりながら安は掛け布団を上げた。この三日で俺の人生は大きく変わった。本当に別の世界に来てしまったように。でもこの選択が間違っていなかったと

『にゃ』

よかったのだと思いたい……

ぼやけた視界にうつったのは客間の壁ではなく、真っ黒の「にゃ？」

猫。

バリバリバリ

「にゃー！」

すいません、前言撤回。

「せ……西夜……………」

やっぱりちよつと血迷ったかもしれない。

「だって天川さんが」

白飯、みそ汁に焼き魚と煮物が並ぶ食卓を安は初めて実際に見た。

しかし、その立派な朝食より、頬の引っ掻き傷の方が気になる。

「確かにハルは殴ってでも起こせて言ったけどね。でもこんなことに能力使わなくても…」

「気にせーへんでいいよ、減るもんやないし」

大きなちゃぶ台の向かい側で得意げに鳴く。

黒猫を膝に乗せて悪びれもせず西夜は言う。

（俺の寿命が減るって！）

「すみません、太榎さん。西夜さんはいつもこうなので横から急須を持ってきたのは和服の上品な老女だった。

「どういう意味や、婆ちゃん」

西夜が口を挟む。

「あ…いえ…こちらこそロクに挨拶もしないで」

「私はお父様とは少し面識があるんですよ」

「そうなんですか？」

「遅れましたが、時実鏡子ときみねきょうこと申します。西夜さんと東子さんのお世話をさせて頂いています。よろしくお願いいたします」

深々と頭を下げる。

「あ、太榎安です。お世話になります」

「困ったことがあったら遠慮なく仰ってくださいね」

（今、誰かさんの性格に困ってます）喉まで出かけた言葉を飲み込んだ。

「あ、東子、おはよー」

西夜が声をかけた先には襖に体半分隠れた少女がいた。

「ウチの妹の東子」

言われると、少女は黙って顔を見せた。

前も後ろも切りそろえられた髪。小柄で色白の立ち姿に白と赤の袴が映える。少女は無表情のまま安に軽く頭を下げた。

「はじめまして、太榎安です」

返事はない代わりに西夜が割って入った。

「念のため、東子に手え出したりしよったら、全身全霊をもってブ

チ殺すから☆」

（わあやっぱり俺、この恐怖屋敷出て行きたいかも）

「その…」

焼き魚を口に運びながら安は言う。

「無口な子だね」

「ああ、東子は喋れへんのや」

西夜が答える。

「え？」

「東子にも能力があつてな、預言者の力。全てを見通し預言する能力。その代わり、預言以外の言葉は口に出来へん」

第参章「イエ」(2)

「ハルさんから聞いたけど、お前今日からフシギ少年の家で居候なんだって？」

放課後、帰宅の準備をしていた安に泉原が話しかけてきた。遥歌は卒業式の準備で生徒会室に呼び出されて行っていた。

安が転校を取り止めにし、戻って来た時、クラスは一時騒然としたものだが、それなりにクラスメートの帰還を祝い、すぐにまたいつもの通りの生活に戻って行った。

「あはは、フシギ少年かぁ。言い得て妙。神社の離れだけどね」

「でも意外、安が他人と暮らそうとするなんて。どっちかって人と距離置くタイプじゃん」

「うーん、なんとなく頑張ってみよーかなーと」

「何をだよ」

「いろいろ」

大きく伸びをする安を見て、泉原はポリポリと頬をかいいた。

「…うーんまあ、いい傾向なんじゃない？」

ひよい、と覗き込んだ顔に智樹は手を止める。透き通る白い肌に横だけ伸ばした茶色の髪と奇妙なほど整った顔だち。

「あれ、今日は人が少ないですね」

「卒業式の準備にかり出されていつも以上に人いないんだよ」

「俺と泉原の二人だけで、都音入れても三人。バスケやめてオセロでもするかって言ってた…痛っ」

茶化す部員を智樹は殴って止める。それに架織は笑いながら答えた。

「でも二人が三人になってもあんまり意味がないんじゃない？」
当然の指摘に重い沈黙が流れる。

「…オセロやめて大富豪でもするか、部長？」

「…………やめろ」

架織は空笑いしながら上着を着たまま、体育館に入る。

「今日は練習なしで帰りますか？」

「天川！旗右を知らないか？」

講堂でパイプ椅子を並べる遥歌に飛びついて来たのはある教諭だった。

「知りませんけど……どうかしたんですか、河合先生？」

「どうもこうもないっ！旗右を待生で取ってくれる大学があったんだ！で、説明するから放課後來いって言ってたのに……」

「……逃げられたんですか『また』」

冷やかな遥歌の言葉に河合教諭は大きく頷く。

「旗右は一体何が不満なんだろうーなあ」

がつくりと肩を落とす中年の物理教諭に苦笑する。

「もう、来週卒業ですし、いいかげん諦めたらどうですか？先輩、経済的にも大学行くの難しそうですし……」

「わかってるよ。だからこうして、学費免除で奨学金まで出るなあ

……」

資料の束を抱えて力説するのを横目に、遥歌は椅子の並びを正して行った。

第参章「イエ」(3)

帰路、通学路を歩く安に、反対側からやってくる姿が見えた。

(旗右先輩…) 社交辞令にぺこりと頭を下げるとすれ違いざま低い声がした。

「あの家から出て行け」

「え？」

「水吹の兄の口車に乘せられているようだが、命が惜しければこれ以上水吹に関わるな。父親の二の舞になりたいか？」

「ち、ちよっと！旗右先輩！それって…」

ぐいっと深緑の制服の裾をつかむ。

「触るな、放せ」

放せ 化け物が

父さんに似た 低い声

革手袋越しの手で安の手が強くふりほどかれる。

反動で数歩後ずさり、呆然とする安。

それを見ようともせず、再び衆は人ごみの中に姿を消した。

『放せ』

安は少しよろめき、石塀に背中を預ける。

得体の知れない頭痛に襲われ、頭を抱えた。

それは記憶

『放せ 化け物が』

次第に荒くなる息遣いを必死で抑える。
引き戻されて来る記憶を必死で抑える。
流れ出る一筋の汗。
心臓の音が自分でも聞こえる。

だめだ

だめだ

来ちゃだめだ

ここに来ちゃだめだ

ここに来ちゃだめなんだ

『嫌わないで』

目眩が した。

「太榎さん！」

流れ出す声を止め、安を現実に戻したのは少年の声だった。
頭を覆っていた手を少し放すと、自分の顔を覗き込み伺っていたのは架織。

安は徐々に自分の神経を街の中に返す。

「トネ…」

「真っ青ですよ。大丈夫ですか？」

架織は気遣わしげに目を細める。

「あ…うん…：だいじょぶ…ありがとう」

呼吸のペースも元に戻ってくる。

「体調悪いならお医者さんでも…せめて家まで送りましょうか」

「いや、ちょっと目眩がしただけ。大丈夫だから」

「そうですか？」

そこで安は架織の顔をしっかりと見た。

彼は顔を上げた安に穏やかに笑った。

「びっくりしましたよ。声かけようとしたら、いきなりフラついて気分悪そうにして」

「いや……いいから……ありがとう」

架織は不安げに分かりました、と言って頭を下げ、安が今来た方向に歩いて行った。途中何度か振り返ったが、安は気がつかなかった。

まだ痛む頭を押さえる。

「……『放せ』……か」

微かに口を歪めた。

第参章「イエ」(4)

「えー！じゃあ安クンまだ帰ってないの？マジで？」

居間で西夜の鼻先二センチまで寄って叫んだのは高い声。

この辺りのものではない黒いセーラー服。金に染めた長いウェーブヘアに人の目を引く美しい容貌。勝ち気な瞳に筋の通った面長の顔。恐らくその辺のモデルなど問題にならないのではないだろうか。

「砂城がわざわざ会いに来たんだよっ！」

西夜は笑ってコーヒーカーップを置いた。

「でも確かに遅いよなあ、帰宅部って言うと思ったのに」

外は夕暮れが支配していた。

「どうしたのかなあ」

俺は何をやってるんだろう。

帰らなきゃいけないのに、こんなところ来て。

ふと気づくと十五年も住み慣れた家の前にいた。今日帰らなきゃいけないのはここじゃないと言うのは分かっている。郵便受けを見ると何日分かの新聞とチラシ、電気代の明細書。

もう決めたんだ頑張るって

(郵便止めとかなきゃ)

だから

それらと一緒に分厚い封筒が入っていた。

(俺あて？)

てっきり父親の仕事の何かだと思ったら、宛名面に書かれたのは「太榎安様」という字。裏返し、差出人を見て固まった。

「太榎万夫」

だからもうこれ以上かき乱さないで

「あかん、ケータイも出ーへん」

コードレス電話の受話器を置いて西夜は言う。

「いくらなんでも遅すぎよお」

ウェーブした髪を手で梳きながら砂城は返す。

「家出？」

「まさか。昨日来たばかりで：トコちゃんは知らない？」

東子は表情を変えずに首を横に振った。

「よね」

二人で大きなため息をつく。

「まあ、大丈夫でしょ。子供じゃないんだし」

「：駅です。お降りのお客様は：」

電車がホームを滑り出る。

俺は何をしてるんだろう

降りた安は小さなメモを手に使っていた。

父さんあなたは

そこに書かれていたのは一件の住所。

どこまでついてくるつもりですか

十分ほど歩いただろうか。

（確かこの辺）

着いたのはある家の前。

どこまで俺を動かせば

古くも新しくもない、ひっそりとした佇まいの小さな一軒家。表

札はない。白く塗られた壁に映える茶の窓枠。その向こうは二階の

一つを除いて、全てカーテンでふさがれていた。

俺は一人で生きられるのですか

不意にその時、窓に人陰が映っているのが目に入った。二階から

自分をじっと見下ろしている女性の姿。長い黒髪に透き通るような

白い肌。濁った緑色の和服。黒い瞳と目が合った。

途端、安の体中に痛みが走る。頭の中に流れ込んで来る映像。

無数の人 人 人。

歴史の教科書で見たような古い和服を着た男女。
何かをしきりに話す人。

叫ぶ人。

歩く人。

走る人。

泣く人。

笑う人。

書く人。

ひどく遠くで誰かの声が聞こえた。

（誰？）

悲しげに微笑む女。

（誰？）

目に映ったのは写真でしか記憶のない男。

（父さん……？）

笑って話しているが何も聞こえない。

何も聞こえない。

次の瞬間、安は受け身もとらずアスファルトに倒れこんだ。

最後に見たのは

遠く、ガラスの向こうでただ自分を見つめる女性の瞳だった。

第参章「イエ」(5)

見慣れない天井が目に入った。

「やっと起きたか」

低い声に上半身を起こし、周りを見渡すと、古いワンルームアパートのソファベットの寝かされていたことが分かった。

「目が覚めたなら出て行け。迷惑だ」

声の主に目を丸くする。

「き、旗右先輩？なんで…」

「私の部屋だ。道端で倒れた貴様を引きずってくるのがどれだけ大変だったと思う？」

「す…すみません」

畳み掛ける栄に謝りつつ、先輩は一人暮らしなのかと思ひめぐらす。

「あの方がどうしても助けろと仰るから…でなければ捨ててきたものを…」

「そうだ！あの方って…」

『あの女の人』という言葉を出す前に栄が遮った。

「貴様、何故あそこにいた？」

「え？」

「何故あの場所を知っていた？」

冷たく厳しい目。

「あ…その…父から俺へっていう名義で郵便が届いてたんです」

鞆から取り出した分厚い茶封筒と手に握っていたメモを差し出した。

「中には古い本とメモが入ってて、本は古文みたいで読めなかったんですけど、メモにはあの家の住所が書いてて…」

くしゃくしゃになったメモを広げて見せる。

「気になって…」

革手袋をした手で安からメモを取り上げた。

しばらくの沈黙の後

「ナヲか…」

ポツリと独り言を言った後、ゴミ箱に投げ入れた。

「ともかく二度と近づくな。あの家にも、水吹の家にも…」

バタン

「安！」

タイミングよく玄関のドアを開けたのは、その西夜だった。

「連絡もらって驚いたで！ 栄さんにいじめられたりカツアゲされたりしてへん？」

走ってきたそのスピードのまま、安に抱きつく。

「だから大丈夫って言ったでしょ」

聞き慣れない声が西夜の向こうからした。

「やつほー、栄くん」

「砂城」

手を振る美女に、あからさまに嫌そうな顔をする。そんな態度は気にも留めず、彼女は安に向き直った。

「はじめまして、太榎安くんね」

強気な瞳はそのままにたおやかに笑う。

「茅原砂城よ。砂の城、って書いてサキ、可愛い名前でしょ？ あ、かやはらさき

呼ぶ時は『砂城ちゃん』でお願いね。安くんかわいーから『サッキー☆』とか気安く呼んでくれてもオッケー。綾楓女学院の二年C組一二番。ついでに九月二七日生まれ天秤座のB型。好きな食べ物はハーゲンのチーズケーキ…」

「黙っとったら美人」

「てめえが黙れ☆」

口を挟んだ西夜に笑顔のまま黒い言葉を返す。

（ハイテンション生物が二人になった）安は頭痛が起こりそうな状況を嘆く。

「察しはついていると思うけど、西夜くんたちと同じ神の能力を持つ

人と言えば分かるかしら」

能力…ということは……

「じ…じゃあやっぱり旗右先輩も……」

「右に同じってね」

事も無げに砂城は続ける。

「ちなみに砂城と栄クンは超ラブラブべっ！」

言葉の途中で栄の革手袋が砂城の顎にぶつけられた。

「太榎、西夜。これを持ってさっさと帰れ」

（はいっ超ラブラブ☆でないことはよく分かりました）

「砂城」

部屋を出て行った安と西夜に続こうとする砂城を呼び止めた。

「貴様と西夜はいつまで太榎を騙しているつもりだ？」

「ああ、それで栄クン、キゲン悪かったんだ」

「質問に答えろ」

「だましてなんていないわよ。隠してる人が多いだけ。砂城は栄クンほど優しくないの」

ニヤリと口の端で笑い扉を開ける。

「じゃーね」

扉は閉められた。

第参章「イエ」(6)

「ごめんね、西夜。迎えにこさせちゃって…わざわざ…」

「ちゃうやろ！謝るのはそこじゃないやろ！」

夜道に声が響いた。

「遅くなるんなら電話くらいしてよ！どれだけ心配したと思っとなの？」

心配？

「ったく何があったか知らへんけど…」

「西夜、心配とかしなくていいよ」

「は？な、何言うとるん？心配ってするなって言われてせーへんもんとちゃうやろ！」

「？そーなの？」

「『そーなの？』って…」

「ごめん」

安は一呼吸おいて呟いた。

「分からないんだ、そういうの」

月がきれいな夜だった。

「西夜、話したいことがある」

西夜をつれて着いたのは

「ここって安の家？」

安は鍵を開けて中に入る。

「ずっと父さんと二人でここで暮らしていたんだ。でも俺は…父さんの顔も声もほとんど知らない」

「え？」

リビングの電気をつけて安はソファに座った。西夜もその向かいに座る。

「小さい時、母さんがいなくなって、父さんは大学にこもりきりだ

ったから、しばらくは近所の人に来てくれたりもしたけど、すぐに来なくなって、それから……」

ソファの背もたれから背を離す。

「ずっとここで父さんを待っていた。毎月、父さんが一か月分の食費を封筒に入れて、テーブルに置いていなくなる。俺はそれで学校帰りに弁当を二つ買って毎日毎日、何時間でも」

それは気の遠くなるほど

「今日こそは父さんが早く帰ってくるかもって、じっと座って待って」

滑稽な話

「今日こそは一緒に夕飯を食べれるんじゃないかって」

『あの日』から

「結局一度も俺のいる時に帰っては来なかったけど」

気の遠くなるような時間を

一人でただ待つて過ごして来た

拒絶されてると

避けられていると考えないように

「俺にとっては家に帰ったとき人がいることも、帰りが遅くて心配されることも、食事が用意されてることすら……不自然すぎて怖くなる」

「それじゃウチが……」

「ううん、西夜が声をかけてくれたのは本当に嬉しかったし、このままじゃ絶対ダメだから頑張ろうと思ったけど……やっぱりムリな気がする」

うなだれるように頭を下げた。

「ごめん西夜……本当にごめん」

「なんで安が謝るん？そんなのあかんに決まっとるやろ！そないして安は万夫さんの影を追い続けるんか！いつまで？一生？安は何もしてないのに、悪くないのに謝ってそんなのおかしすぎるやろ！」

西夜は思わず立ち上がった。

「もっと怒れや！万夫さんにも親戚にも…無神経だってウチにも怒ればいいやろ！」

「…ごめん。俺、怒り方がよく分からないんだ」

「また謝っ…」

「でも代わりに西夜が怒ってくれてちよつとすつきりした。ありがとう」

無邪気な笑顔。西夜は拍子抜けしたように苦笑して腰を下ろした。

「安は…ウチに来るために頑張るって言ったやん。でもきつとそこが間違つとるんや。家ってそういうものとちゃうんや。頑張って自分が迎え入れられようとするんやなくて、無条件で自分を受け入れてくれる所……ってまあ家出中のウチが言うても説得力ないけどな」

ポリポリと頭をかく西夜に安は首を振った。

「ううん、西夜の家を見たら分かる気がする」

「そうや。温かい食卓とか今から帰るって電話もそんなこと全てこれから取り戻せばいい。いや、そんな難しく考えへんでも、朝起きたらご飯ができてて楽やなあとかでいいのかも。悪いことがあったらみんなで一つずつ直してくんや」

それは誰でも知っているはずのこと

「家ってそういうものやろう」

誰も気がつかないこと

「ありがとう、西夜」

第参章「イエ」(7)

「さてっ」

西夜はカバンを持つとりビングの扉に向かった。

「帰るの？」

「ううん、今夜はここに泊まる。で、安に任務をつかわすで」

「は？」

「はい、水吹で…あ、安さん。今どちらです？私、心配で…」

『はい今西夜と一緒に太榎の家にいます』

「あら西夜さんと？」

『明日休みですから、こっちに泊まります。あ…えーっと…その…心配かけてすみません』

「いいいえ、お氣をつけてください。西夜さんをよろしくお願いします」

ガチャリ

電話を切ると同時に玄関のドアが開いた。

「ただいまー。ちゃんとできた？任務『家に心配しないでコールをせよ』は」

「あ…ああ…：あんな簡単なもんなの？」

「そうあんな簡単なもんなの！」

「西夜はコンビニに何の用だったの？」

「えへへ聞きたい？聞きたい？」

言うところコンビニのロゴが入ったビニール袋を差し出した。

「じゃじゃーん、鮭弁と幕の内、どっちがいい？」

「へ？」

「夕飯だよ。食べよう『二人で』」

二人で

泣きそうなのを必死にこらえて笑う

「……………俺、幕の内」

「え？ウチも狙ったのに！」

「じゃあ最初から聞かないでよ！」

「社交辞令！」

「そんな二択の社交辞令があるか！」

「こーなったら争奪ジャンケンや！」

「いーよ、俺、鯉で」

「ジャンケンするんや！」

その日、一晚中俺達は騒ぎ続けた

好きなテレビや学校の話

他愛ない話ばかりを

俺は父さんと

こんな時間を過ごしたくて待っていた。

その穴が完全に埋まることは

もうないけれど

必死になって埋めようとしてくれる人がいる

傷は完全に癒されたわけではないけれど

癒そうとしてくれる人がいるだけで

こんなにも心が安らぐ

なあ 昔の俺

これ以上何を望む？

なあ

第参章「イエ」(8)

「おはよう」

いつの間にか眠りについてた西夜を起こす。

「西夜 帰ろうか」

聞いていること

聞けないことがたくさんある

俺のこと

能力のこと

あの女の人のこと

西夜自身のこと

そして何より旗右先輩のあの言葉

『命が惜しければ水吹の家から出て行け』

石段を上って迎えてくれたのは鏡子だった。

「おかえりなさい」

でも今は

「ただいま」

「えっと……その…」

西夜が背中を押した。

「た………た……だいま」

ここにいたいと全力で願う

能力のこと

あの女の人のこと

西夜自身のこと

そして何より

『命が惜しければ水吹の家から出て行け』

石段を上って迎えてく

第参章「イエ」(9)

「すみません、喪服お借りして」

「いえ、他界した主人のものがピッタリでよかったです」

ようやく行われることになった万夫の葬儀は抜けるような青空だった。

一応、喪主なのに深緑とベージュの制服だとおかしいだろうと、鏡子が出してくれた黒の喪服を合わせてみる。

「安ー、もう行くん？」

「うんそろそろ。西夜は来ないの？」

「嫌や」

安の問いに心底嫌そうな顔を見せる。

「母さんがもし来とったらウチ京都に連れ戻されるよ。そいじゃあ遅れないようにいつてらっしゃい」

手を振ると杜側の東子の方へ向かった。

「…西夜って家出したって本当なんですか？」

「はい」

鏡子が答える。

「西夜さんは神の能力を持つものとして旧家ではとても大切に育てられたのですが、東子さんは事情があってこちらに預けられていたんです。それが五、六年前になりますか。東子さんを追って一人で東京に来られました。奥様：西夜さん達のお母様は今も反対なさっています。私は…あんなに笑うお二人を見て、帰れなんてとも言えませんよ」

喋れない東子に何を言っているのだろう。二人で微笑み合う。

「そうですね。あんな風に笑える西夜に正直憧れます」

「ええ、でも安さんの笑顔も穏やかで素敵だと思いますよ」

笑える場所が

「そ…そうですか」

笑える家がある

それは何と尊いことか

「太榎教授のご子息ですか？初めまして。私、教授と同じ大学にいました弓と申します。立派な方でしたのに不幸な事故で」

初めて聞く自分の父親のこと。

「優秀なのに人望もあって大学でも慕われていました」

初めて正面から見る自分の父親の顔。

「本当に惜しい方を…」

俺が追ってたのはどこにでもいる平凡な顔をした男だった。

「安君」

「加奈叔母さん」

喪服姿の叔母が距離をおいて話しかけて来た。

安は深々と頭を下げる。

「すみません。あなたが何を知っているのか分かりませんが、今は自分のことで精一杯だから、あの家でやっていきたいと思います」

だからもう父さんの影は追わない

「どうか…ご心配なく」

俺は俺の真実を追っていく

結果として父さんの影を追うことになっても

いいだろう、自分

「安、お疲れ様」

一通りの行事を終え、墓石の前に立つ安に遥歌が声をかけて来た。

「別に俺は疲れてないよ。通夜も葬式も業者任せだったし」

「でもまあ、それに限らず、ここ数日いろいろあったし」

「あはは、そーかも」

振り返らずに安は尋ねる。

「ねえ、ハル。父親が死んでも悲しい顔もしない俺って気味悪いと思う？」

問いには答えずに安より一步墓石に近寄った。

「ハル？」

ドカツ

遥歌は何の躊躇もなく墓石を思いきり蹴飛ばす。

「あ：あの」

御影石はびくともしなかったが、振り返るとせいせいしたような笑顔を見せた。

「泣かない安が悪い訳ないじゃない。死んでも息子に泣いてすらもらえないような人生送った万夫おじさんが悪いに決まってるわよ」

「笑ってとんでもないこと言うなあ、ハルは」

しばらくの沈黙の後

「帰ろっか」

「うん」

立ち上がった安に遥歌も倣う。

霊園の中で一人の少年とすれ違った。透き通る白い肌に横だけ伸ばした茶色の髪と奇妙なほど整った顔だち。

「トネ？」

「お葬式には間に合わなかったので、せめてお墓参りだけでも思いました」

「あ、ありがとう。場所分かる？案内しようか？」

「いえ、さっき霊園の管理人さんに聞いたので大丈夫です」

仏花を手に向かう都音を遥歌はどこかいぶかしげに見つめていた。

悲しくないわけじゃない

ずっと待ち続けたことが報われることはもうない

けれど新しくやり直せる希望をくれる人がいる

悲しまないでいいだろう 父さん

待つための家でなく待ってくれる家を手に入れる

第参章「イエ」(10)

「お帰りー。今日の夕飯はウチが作ったんやで」

満面の笑顔で、その辺の女子よりも似合うエプロン姿の西夜は明るく出迎えた。

「……………西夜…一体どんなフシギ料理を…」

「？東子ーばーちゃんーご飯にしよう」

出て来たのは手の込んだ品数の多い和食。いや、見た目じゃない味が問題だ。恐る恐る煮物を口に運ぶ。

「ま…マジで美味しい……………」

「相変わらず美味しいですねえ、西夜さんのお料理は」

「学校がもっと早よ終われば毎日でも作るんやけどね」

(オチは？)

「美味しいやろ、安。ウチ料理は得意なんや」

「う…うん」

待ってくれる家

ここにいたいと 全力で願う

「伊邪那美様^{いざなみ}」

家の中で揺り椅子に揺られながら、喪服姿の女性はゆっくりと振り返る。

「やはり先日太榎安がここに来たのはナヲの差し金のようにです」

「ナヲさんの？」

「本人に問いただしたらあっさり白状しました。一体何のつもりか…」

「…そうですね、でも」

長い黒髪に透き通るような白い肌。

「私も一度太榎安様とはきちんとお話ししたいと思っています」

「伊邪那美様…」

栄は驚いた表情を見せ、顔を伏せた。

世界が交錯する

「私は：反対です」

家を手に入れた者

持たない者

なくした者

価値を見いだせない者

人がいる

その数だけ

思いは交錯し始める

番外編その壱「セイギ」(1)

すべての人に関心のあることなんてあるだろうか？だれにでも、世界のどこに住んでいる人にも、あらゆる人間に関係あることなんて、あるのだろうか？あるんですよ、親愛なるソフィー。

「ソフィーの世界」哲学者からの不思議な手紙」

著 ヨースタイン・ゴルデル

訳 須田朗、池田香代子

女子中学生の津山双葉つやまたばなは今日も憂鬱な顔で通学路を歩いていた。

双葉は気が小さくて、他人に自分の意見を通すことなど到底できない。常に人に指図され動かされる側の人間だった。勉強の成績は並以下で運動音痴。背は低くて童顔で胸は発育不良。

人より劣っている点ならいくらでも挙げられるが、人に誇れるとりえなど、何一つ思い浮かばない。ただ自分が嫌いになっていくのみだ。

また辛い一日が始まる。

学生達が歩いてゆく通学路のわきに設えられたガードレール。

その上に腰を下ろして、彼女はぼんやりと通行人をながめていた。

彼女は普段通り暇でしうがなかった。

歳の頃は二十歳前。背中まである艶やかな黒い長髪。端整な顔立ちに闇色の瞳。髪や目の色とは対照的な、白いワンピースを身に着けている彼女の姿は、朝の通学路には相当に不自然だったが、彼女も学生達を意識することなくぼうっとしていた。

そんな時に、一人の女子中学生が彼女の前を通り過ぎた。その頼

りない背中を見て、久方ぶりに興味で心がざわつくの彼女は感じていた。

番外編その壱「セイギ」(2)

「で、その英語の先生がバカでさー」

五人の女子グループの実質的なリーダー・広田美鈴が中心となつて雑談を進めている。

今は授業の合間の休み時間で、美鈴の取り巻きともいえる四人の中に、津山双葉が含まれている。五人が等しく同じ立場というわけではない。そこには暗黙の了解：階級が存在している。

美鈴をリーダーとして、その側近とでもいうべき発言力をもつ女子が二人。その二人の下に、普段はあまり目立たないがたまに面白いことを話す女子が一人。

その下：つまりグループ中最低の地位を占める人間が双葉だった。なるべく笑顔を絶やさずに、ウンウンと皆の話にうなづくのが双葉の主な仕事。

「あ、そういえばアタシ今日掃除当番だった。今日用事があるんだ。津山さん代わってくれないかな？」

美鈴の側近の一人が、両手を合わせて拝むように双葉を見た。

「う、うん！ いいよ！」

双葉は笑顔でそう応えた。

双葉には彼女の嘘を指摘して代わりを断る勇氣もないし、理不尽な要求を受けたとしても、それはこのグループの中の自分の役割であり、仕方のないことだと双葉は割り切っていた。

「ありがとう！ 津山さん優しいからいつも助かるよー！」

双葉は内心で自分に言い聞かせる。双葉は広田美鈴とその取り巻きの力で、いじめや仲間はずれといったものから守られているのだ。その対価を支払うのは当然のことだと双葉は考える。

電話をかけるには通話料がかかる。塾に通うには授業料がかかる。マンガを読むにはお金を払って本を買う必要がある。それらと同じように、守ってもらうためにはそれ相応の対価を払うべきなのだ。

世の中の仕組みからいって、弱い双葉が強い美鈴達に支配されるのは当然のことだ。そう納得して、双葉はそれ以上深く考えないようにした。

番外編その壱「セイギ」(3)

それから数日後、双葉の身の周りに不思議な出来事が起こり続けるようになった。

その始まりは、商店街の福引で、双葉が二等の温泉旅行招待券を引き当てたことだった。普段からついていない双葉が二等を引き当てたのは、偶然だと誰もが考えるだろう。実際に双葉自身もそう考えていた。

しかし双葉の幸運はこの福引だけに留まらなかった。なぜか幸運が立て続けに起こるのだ。以前に応募した漫画雑誌の懸賞が当たり、双葉は前々から欲しかった携帯式のCDプレイヤーを手に入れてしまった。双葉の驚きと喜びが冷める前に、もう次の幸運が双葉に起こる。

双葉はよくお金を拾うようになった。その金額は五百円玉だったり、千円札だったり、時には財布が丸ごと落ちていたりする。拾ったお金は律義に交番へ届けた。何度お金を拾って届けても、またお金を見つけて拾ってしまう。

お金を拾う以外にも、奇妙な幸運は次々と起こっていった。

「じゃあこの単語を……津山、訳してみて」

「は、はい……！」

英語の授業中、教師が双葉を指名して問題を答えさせようとした。双葉は動揺し、不安な顔でノロノロと椅子から立ち上がる。

「えっと……あの……」

口ごもっている双葉の様子から、今回もダメだろうなと教師は内心で思っていた。

いつものことながら、自分のためっぷりにうんざりしつつ「分かりません」と言おうとした時、彼女は教師が意味をたずねた英単語……『hour』の意味に心当たりがあることに気付いた。覚えてい

た数少ない英単語のうちの 하나가、その『hour』だった。それをまるで狙ったように教師が質問してきたのだ。幸運としか言い表せないことだった。

「じ、時間…だと思います…」

おずおずと正解を答えた双葉に、英語教師はどうせ答えられまいという予想を裏切られて目を丸くした。

「そう。時間、ですね」

一瞬だけ、クラス中の視線が立っている双葉に集中した。クラスメイト達も双葉が問題に答えることができたのが意外だったのだ。

これは異常事態だ。

偶然も三回続けばそれは必然だという。

双葉の場合、三回どころか何度も幸運が続いている。

これはもはや、ただの偶然の連続などではない。必然的な、何らかの現象だ。幸運が連続して起こる現象は、非科学的な超常現象だ。オカルトの世界だ。幸運自体は嬉しいものでも、それが原因不明の不可思議な現象によるものとなれば話は違う。一体自分はどうなっってしまったのかと、双葉は不安になった。

番外編その壱「セイギ」(4)

津山双葉が不思議な幸運に見舞われるのと同時に、それとは別の奇妙な出来事が彼女の身の周りで起こっていった。広田美鈴が、突然の高熱で倒れ学校を一週間以上休んだのだ。クラス担任によれば、高熱にうなされ、一週間ろくにものを食べられずに苦しみぬいた末に、美鈴はよろよろと学校に戻ってきた。

その時の彼女は一目で分かるほどやつれていて、しばらくは気力もなく大人しい様子だった。グループの頭である美鈴に元気がないので、自然とグループ全体の活力も低くなり、そのせいか双葉が美鈴達から理不尽な要求を受けることもほとんどなくなった。

美鈴が学校に復帰すると、今度は他のクラスメイト達が、まるで美鈴につられるようにして次々と病気になったり部活動で怪我をして休んでいった。いずれも程度は軽く、二、三日で治るものばかりだったが、それにしても数が多い。一週間の間に六人だ。怪我の者もいれば病気の者もいる。

そして次の事件は、クラスの欠席者がゼロになってからすぐに起こった。双葉のクラスに、学校外部からの侵入者：泥棒が入ったのだ。

それも女子生徒の持ち物だけを狙って盗んでいく、非常にたちの悪い窃盗だった。十一人もの女子のロッカーが荒らされ、中に入っていた体操服や運動靴、ノートなどが持ち去られた。

双葉のロッカーは無事だった。内心で私物を盗まれたクラスメイト達に同情した。

双葉はあいかわらず奇妙な幸運が連続していたが、それと対を為すかのように不運・不幸がクラスの中で続いていた。

泥棒騒ぎもさめやらぬうちに、今度はクラス担任が病気で倒れた

のだ。さらに、休み時間中にふざけあっていた男子の一人が、押されて転んだときにロッカーの角に頭をぶつけて頭を切った。

事ここに至り、双葉のクラスの何人もの強い不審感を抱くようになった。

不幸の伝染病。

そんな漠然としたイメージを思いつく者もいたが、実際にはそんなものはない。だが双葉だけは、今の不可解な状況を「不幸が連続して起こる現象」ではないかと考えていた。

番外編その壱「セイギ」(5)

校門前でとりとめもなく時間を過ごしていた黒髪の彼女は、下校する生徒達の中に津山双葉の姿を見かけた。相変わらず中学生らしからぬやる気のない顔で、とぼとぼと歩いている。彼女が関わってから、もうそれなりの日にちが経っている。

「そろそろタネ明かしの頃合いかな」

愉快そうにつぶやいて、黒髪の彼女は双葉の後についていった。

人通りのない通りに入った双葉の右肩に彼女は手をかけた。双葉はびっくりと振り返る。そこにいたのは見知らぬ美女だった。

「な、何ですか？」

「直接会うのは、はじめまして。私、綾瀬川楓^{あやせがわかえで}」

「直接…？」

「最近、君の身の周りで不思議な事が起こっていると思うんだけど…気づいているかな？」

「…はい。運が急に良くなったと感じています…。不自然なくらいに…」

思っていた通りとばかりに綾瀬川は微笑を浮かべる。しかしそれはどこか冷たくて、不吉なものを孕んだ笑みだ。

「予想はついてるかもしれないけれど、君の運が良くなったのには原因があるんだよ。私が君を幸運にしてるんだ。といっても神様みたいな大それたモノじゃない。私は普通の人間側の基準からすれば、悪の方に分類されるだろうしね」

「え…？」

『悪』というフレーズが双葉の心に影を落とす。しかしその言葉の意味を問う前に、綾瀬川は話を先に進めてしまう。

「私は食べ物や空気の他に生きていくためにあるモノが必要なんだ。なんだと思う？」

「……………」

そんなもの、分かるわけがない。困惑し返答につまる双葉を見て、綾瀬川は再び軽く笑う。

「人間の幸運、だよ」

「……人間の……幸運……？」

「幸運はそれ自体が大きなエネルギーなんだ。私は人が持っている幸運をその人に消費される前にもらって、それを無色の力に還元して自分の体の維持に使う。私は人の幸運を食べて生きているんだよ。人間からもらった幸運は本来なら私のものなんだけど、それをただのエネルギーにしちゃう前に双葉にそのままプレゼントしてたんだ。君が最近ツイてたのは、こういう理由があったんだよ」

「…あ、あの…。あ、綾瀬川さんに…幸運をとられた人は……どうなるんですか……？」

「不幸になるだけ」

「……！」

考えたくなかった可能性が真実であったことを綾瀬川から教えられ、双葉はしばしの間、声が出せない。そんな双葉を気にする様子もなく、綾瀬川は罪悪感のかけらも見せずにおしゃべりを続ける。

「…それじゃ最近クラスで悪い事が起こっていたのは…」

「君がクラスメイトの幸運を使ったせいだね。その人の幸運が減ったから、不幸に感染して悪い事が起こったんだ」

決して考えないようにしていた最悪の答え。それを見て、綾瀬川が薄く笑う。

「クラスの人が不幸に見舞われたことを気に病んでいるのかな？大丈夫。気にすることなんてないよ」

「……綾瀬川さんは……どうも思わないんですか……？」

これは幸運の押し売りだ。

双葉の気持ちも考えず、他人を不幸にして双葉に幸運を押し付ける綾瀬川の独善的なやり方に、双葉は内心で怒っていた。

「どうも思わないよ。他人が嫌だと思ふことはやめましょう。なん

て考え方は君の倫理観でしょ？私が縛られる理由はない。私は人の幸運をもらって不幸にするモノなんだ。ただ私は正真正銘人間だし、考え方だって普通の人からそう離れたものでもないと思うし…双葉。顔が青いよ。他人を不幸にしたことがそんなに後ろめたいのかな？」
双葉は小さく頷いた。

「他人の幸運をもらった結果、その人に不幸が訪れようが、気にすることなんかないんだよ。奪い合い・傷つけ合いは人間みんながやってることだしね。有限の価値あるモノを奪い合うゼロサムゲームの中で生き物はみんな生きているんだから、誰かが得をすればその裏で誰かが損するようにできている。君が幸せになって、クラスの人達が不幸になったのはその構造がちよっと露骨ってだけで、他の人達がやってることと程度が強い・弱いの違いしかないんだよ」

「…綾瀬川さんは、どうして私を幸せにしてくれるんですか…？」

「君が可哀想だったから、…かな？」

「可哀想…？」

「うん。登校してる君を見た時、自信がなさそうで、人生と世界に絶望してるなって思った。君みたいな子は珍しくもないんだけど君には魅かれるモノを感じたんだ。だからガラにもなく助けてあげたくなって思ったんだよ」

そう言って、綾瀬川は明るく無邪気に笑う。

人間を不幸にする恐ろしい人とは思えない無垢で透明な笑顔だった。それを見て、双葉の胸にわだかまっていた恐怖や悩みが一瞬ふき飛んだ。今までこんな笑顔を、見返りを求めない純粋な好意を双葉に向けてくれる人がいただろうか？

綾瀬川のやり方は常軌を逸しているが、その善意は本物だ。胸にあふれる温かな気持ちと、現状に対する混乱した気持ちがまざり合っ
って胸が張りつめる。

「私の話はこれくらいかな。運が良くなったことには気づいていた
だろうけど、いつまでも原因不明のままだったら、気味が悪くて不安
だだろうしね」

「は、はい…」

「君、勉強も運動もダメみたいだけど、これでラッキー続きのバラ色人生だね。よかったね、双葉」

「…は、はい…。ありがとうございます、綾瀬川さん……」

「伝えることは伝えたし、今日はもう帰るよ」

「えっ…？綾瀬川さん、どこかに住んでるんですか……？」

「君、私を幽霊か悪魔だとも思っていない？一人暮らしだけど、きちんと家も戸籍もあるんだよ」

「は、はあ…」

「またときどき遊びにくるよ。じゃあね、双葉」

綾瀬川が双葉の前に現れてから三日が経った。綾瀬川はどこかへ行ったきり、双葉の前に出てこない。道を歩けば落ちているお金を見つける。見た瞬間に双葉は「うっ……」と心の中でうめくが無論、落ちているお金は拾わずに放っておく。

クラスの席替えでくじを引けば、窓際で最後列の、ながめが良くて先生からも指されにくい最高級の位置を引き当てる。

放課後になって帰ろうと、机の中の教科書やノートを鞆につめていると、見慣れないものが机の中に入っていることに気づく。パステルブルーの色をした封筒で、裏側には知らない男の名前が記されている。双葉には絶対に無縁の、ラブレター…と一般的に言われるものだろう。双葉は動揺しながらそれを鞆の中につっこみ、顔をほんのり赤く染めながら足早に下校していた。

番外編その壱「セイギ」(6)

「やあ。双葉」

久々に押し付けられた掃除当番を終えて下校していると、道の端のガードレールに綾瀬川が腰掛けていた。

以前、双葉の前に現れた時とは服装が違っている。黒色のノースリーブに膝の高さまでの黒いスカートを着ている。サンダルも黒色で、全身黒づくめだ。彼女の黒く長い髪もあいまって、闇を身にまとっているかのような印象を双葉は受けた。

綾瀬川の出現に驚いて立ち止まる双葉。それを見て、綾瀬川が薄く笑う。

「別に用事はないんだけど、ここで待ってれば君に会えると思ってね。暇だし、少し話そうよ。の帰り道に私がつき合うから」

双葉がうなずいて歩き出すと、綾瀬川も双葉の隣を歩く。双葉と綾瀬川は並んで歩いていたが、会話はなかった。綾瀬川が話そうと言っていたので、双葉は綾瀬川の話のを待っていたのだが、一向に綾瀬川が話し始める様子はない。

「…あ、あの…きよ、今日は前と服が違うんですね…」

ぎこちない笑顔をつくらって自分から話題を振る双葉。綾瀬川はそれに応え、開いた左手を自身の胸元に添える。

「だから、君は私を人外のものだとも思ってるでしょ？私だって汗もかくし垢も出るから着替える必要だってある。それに何より、いつも同じ服だと飽きるしつまらないでしょ？」

「は、はい……。それは確かに……」

日が傾いてオレンジ色に染まりつつある街の道を、綾瀬川は軽い足取りで歩いている。長く艶やかな黒髪がさらさらと揺れる。背すじはまっすぐに伸びて、迷わず前へ、軽やかに歩いている。薄闇に溶け込むような黒い服が、妙に幻想的で美しかった。その整った顔を時々双葉に向けて、楽しげに笑う。

「…あ、あの…変な質問なんですけれど…綾瀬川さんは正義って、何だと思いますか…？人間が絶対に守らなくちゃいけない、大切なものだと思いますか…？」

「これはまた唐突に。君らしからぬ哲学的な質問だね」

「綾瀬川さんと話した後…自分なりに考えたんですけれど…私、頭が悪いから分からなくなってしまうて…。クラスのみんなを見て、正義の力をあまり感じられないんです。みんな好き勝手にやっているように見えるんです。誰も守っていない正義なんて、何の意味があるのかな…、なんて思ってしまうて…」

「君、バカそうに見えて、実はけっこう深い事を考えてるんだね」
綾瀬川の失礼な言葉は双葉には届かなかった。

「その正義は、人間が社会を作る上で都合を良くするためのルールだよ」

「都合を良く…？」

「人間が集団で生活するためには、お互いが傷つけ合わないようにしないといけないよね。皆が暮らしやすいようなルールを作って、そのルールを守ることは良いことだと、逆にルールを破ることは、集団の秩序を乱すことだから悪いこととして集団内の人間を教育する。教育し、ルール違反者には罰を与えて集団の人間への見せしめにする。つまり『良い事をして悪い事はしないようにしよう』っていう教えの正義は、人間社会が存続していくために必要な仕組みの一つなんだよ」

「…正義って…そんなものですか…？」

「うん。だから正義を守らなくちゃいけない必要なんてないよ。無法者として他の人達から疎外されたり、法の裁きが下るリスクはついてくるけどね」

「…たしかに…そうですね…」

「社会を円滑に動かしていくための一般的な正義よりも個人レベルでの話なら自分だけの正義の方がよっぽど大事だと思う」

「自分だけの…正義…ですか……？」

「自分を信じる、ってこと。他人から言われたことを鵜呑みにするんじゃないくて、自分が正しいと思うことを自分で決める。自分の感性を信じて決めた、自分用の信条・生き方。これが自分だけの正義だよ」

双葉は隣を歩く綾瀬川を見た。綾瀬川の足取りはあいかわらず軽く、前をまっすぐに見て歩いている。彼女の表情は清々しいもので、爽快そうだった。ここは街の中だというのに、そよ風が吹く青い空の下、見渡す限り緑で覆われた草原を綾瀬川は歩いているかのようだった。

そんな綾瀬川を見て、なぜ彼女が人生を楽しんでいるのかを、双葉は少しだけ理解したような気がした。綾瀬川は自分だけの正義に沿って生きているのだ。

生き方に一本の芯が通っているから、まっすぐに前を向いて生きている。考えも気持ちもブレないし、迷わない。後ろをふり返って後悔したりしない。だから清々しい気持ちで、軽やかな足取りで、まっすぐに前へ歩いていけるのだ。

「あれ？話してたらもう君の家まできちゃったね」

双葉のすぐ目の前に、津山家があった。

「じゃあね。双葉」

「えっ……？あっ……」

呼び止める前に綾瀬川の姿は見えなくなっていた。

それから一週間が経った。

千円札程度ならば拾って自分のものにしてしまう。学校で自分の手柄になるような幸運が起これば、綾瀬川に感謝しつつ受け入れるようにする。

もちろん、後ろめたさはあった。クラスメイトの中には病気や怪我で学校を休む生徒がちらほらいた。朝のホームルームでクラスメイトが病欠するということを教師から伝られるたびに、申し訳ない気持ちで胸がいっぱいになった。

しかし、それでも皆からもらった幸運は自分を潤おすために使う。津山双葉は今、強者の立場にあった。双葉は、綾瀬川という超常存在の加護を受けている。それによって他人の幸運を自分のものにできる。これは素晴らしいことだ。双葉には体力も知力も根性もないが、通常ではありえないほどに連続して起こる幸運があれば、それらの欠点は余裕でカバーできるといえるものだ。

番外編その壱「セイギ」(7)

綾瀬川の協力を受け入れ、他人の幸運を自分のために利用する、という双葉の決心は、その三日後に起こったある出来事のせいで、あっさりと崩れてしまった。

その日、授業が終わり帰り道を歩いていた双葉は、視界の端の車道中に異常を見つけた。道路上に塗られた中央車線の線引きを明らかに無視して暴走する、自動車である。

「あっ……!!」

言葉通り、双葉が「あっ」と言う間に、暴走車はコントロールを失ってガードレールに突っ込み、轟音が辺りに響きわたった。

正面バンパーから激突した車のボンネットはひしゃげ、フロントガラスの一面にひびが入っていた。走行車の激突を受けたガードレールは大きく歪み、幸いにして突き破られずに歩行者が車にはねられることはなかったものの、周囲は歩行者達の悲鳴と後続車の鋭いブレーキ音が重なり合って騒然とし、地獄絵図のようだった。

運転者は死んだのか。

そんな疑問が双葉の頭をよぎり、かつてない恐怖と混乱と罪悪感で双葉の心が埋め尽くされる。パニックで神経が極度に張りつめ、双葉は不意に吐き気を覚えた。これ以上ここに長くいたら、心が壊れる。皆に罪を責められて、津山双葉は破滅する。理由を考えるよりも先にそう直感し、双葉は運転者の生死を確認することもなく、そこから逃げ出していた。

その日の夜に放送されるニュース番組の中で、双葉の見た交通事故故がローカルニュースの一つとして、ほんの少しだけ流れた。戦々恐々と双葉はテレビのニュースを見ていたが、交通事故の一部始終を知って、とりあえず運転者にひどい怪我がなかったことに安堵した。

番外編その壱「セイギ」(8)

事故が起こってから三日間、双葉は学校を休んで部屋に籠もっていた。親には風邪をひいたと言って休ませてもらっているが、仮病だ。

親も双葉が嘘をついていることを見抜きつつあるかもしれない「寝ていれば治るよ」と言って布団をかぶり、ベッドの上から動かないことで双葉は抗戦姿勢をとっていた。

双葉は今、綾瀬川有能力により双葉が望む望まざるに関わらず他人から幸運を奪い、その人を不幸にしよう。近づいただけで人を不幸にし、場合によっては殺してしまう極めて凶悪なウイルスのような存在なのだ。

双葉は他人の幸運を自分のために使っているかとしていた間、なぜあんなにも心が重苦しかったのかを理解した。ただ 双葉の心が弱いということもあるが、その根本的な原因は、双葉の今までの生き方にまるで沿わないやり方だったからだ。綾瀬川に教えてもらった一般的正義の正体から理屈で他人から幸運を奪うことを正当化し、無理やり自分を納得させようとしていた。

しかし、それでは心は喜ばない。

双葉のようなダメ人間には夢のまた夢という栄光の道が閉ざされたのに、双葉はまるで胸のつかえがとれたような気分だった。清々しくさえあったのだ。

自分の心の声に真剣に、真摯に耳を傾けて、自分は何を大切にし、何をやりたいのかを考える。

そして自分のやりたいことをやる。

その何と素晴らしいことか。

双葉はやっと、自分だけの正義、双葉だけの正義を見つけたのだ。自分だけの正義は、世界のどこかに隠され眠っているような宝物ではなかった。貝が長い時間をかけて少しずつ真珠を創っていくよう

に、今までの人生の中で少しずつ形作られ、自分の内側、魂の奥底に埋まっていたのだ。

しかし今、胸の内が何かで満たされていくのを双葉は感じている。まるで胸が引き締まるような充実感だ。この熱い気持ち、精神の高揚感があれば、胸を張って迷わず前へ進んでいけるような気がするのだ。綾瀬川がそうしていたように。

双葉がこの調子で新しい自分に生まれ変わるためには、綾瀬川に、他人から奪った幸運を双葉のために使うのはやめてほしいと言えない。

しかし、それには大きなためらいを感じるというのが双葉の本音だった。

相手が他でもないあの綾瀬川だということが大問題なのだ。綾瀬川は好意で双葉を助けてくれている。その好意を断れば、ほぼ確実に綾瀬川の気分を害することになるだろう。

「君はいつも悩んでばかりだ。そんなじゃ人生楽しくないよ」

「…えっ…？」

双葉の後ろから、突然声をかけられた。驚いた双葉がふり返ると、そこには綾瀬川が立っていたのだ。

「あ、綾瀬川さん…！どうして私の部屋に…？」

「お見舞い…ってのは口実で、暇つぶしにね」

綾瀬川は笑った。

「しかし、君の部屋には本当に何もないんだね。ラジカセも、マンガも、ぬいぐるみの一つでさえ。この部屋、囚人用の牢獄にそっくりだよ」

「……あ、綾瀬川…さん…あ…あの…」

「ん？」

いつの間にか双葉のベッドの上で両足を伸ばし、うつ伏せになっていた綾瀬川は、双葉の弱々しい声に顔を上げる。

「…も…もう…他人の幸運を…わ、私のために使うのは…や、止めて…ほしいんです…！」

気がつけば、立ち上がっていた。

とても綾瀬川の顔を見て言うことなどできなかった。目を閉じて下を向き、喉の奥から搾り出した声は無様に震えていた。

綾瀬川は何も応えない。

綾瀬川はまぶたを下ろし、そっと笑みを浮かべた。

「やっぱり私は人を不幸にするだけの化け物か」

そうつぶやいて、綾瀬川はかすかな自嘲の笑い声を上げる。綾瀬川のつぶやきも、小さな笑い声も、頭が恐怖でいっぱいなのに双葉には聞こえなかった。

「どうして止めてほしいと思ったのかな？ 人間社会用の正義のしがらみからぬけ出せなかった？」

綾瀬川の声には怒りも軽蔑も込められておらず、むしろ楽しげですらあった。その声を聞いて、双葉が恐る恐る綾瀬川を見る。綾瀬川はいつも通り、無邪気な子どものように笑っていた。

「…ち：違うんです…。私、気づいたんです…！ 他人に迷惑をかけちゃいけないんです…！ それが私の生き方だったんです！ だ、だから…私のせいで他人が苦しんだり死んだりするのは嫌なんです…」

この結論は双葉だけの正義だ。誰のものでもない、双葉だけの宝物だ。余分なものでそれを汚すのは、してはいけないことだと思ったのだ。

「それが君の正義なんだね。双葉」

そう言って、綾瀬川は目を閉じ微笑んだ。満足とさびしさが混ざり合ったような笑みだった。覚悟を胸に抱き、自分に正直に生きるため、自分だけの正義を護るために、双葉は一生懸命闘っていた。

「双葉。君は勇敢だね」

ベッドに寝転んだまま綾瀬川は言った。

「私に逆らえば殺されるかもしれないのに、それでも敢えて自分の気持ちを伝えたんだ。勇気があるよ。もう分かっているかもしれないけれど、私は人間を殺せる。幸運を全部奪えば不幸への免疫力がゼロになるからね」

綾瀬川はほがらかな笑顔を浮かべながら語っていた。話の内容は恐ろしいものだったが、声の調子は明るくはずんでいて、双葉を脅迫したり震える様を見ようとするものではなかった。

のろのろと顔を上げる。いまさら綾瀬川の慈悲を乞いたかったわけでもなく、ほとんど無意識的に行っていた。死んだ魚のように生氣を失い虚ろな双葉の目を見て、綾瀬川が微笑む。

「殺さないよ。助けてあげる」

ようやく今の双葉の頭にも、綾瀬川の言っていることがほんの少しだけ入ってきた。

「お仕事ご苦労様。もういいよ。帰っておいで」

綾瀬川が声を発した直後、何かが双葉の左肩から床に飛び降りた。それは、小さな綾瀬川だった。双葉の手のひらと同じくらいの大きさで、五本の指から黒い長髪的一本一本まで目の前の綾瀬川と完全に同じだった。服も着ていて、白いワンピースをまとっている。人間大の綾瀬川は黒いワンピースを着ているので、それぞれの大きさと服の色だけが違う。

今まで双葉は、この小さな綾瀬川の存在に全く気がつかなかった。綾瀬川が右手の手のひらを上にして前に差し出す。指の先は床についていた。小さな綾瀬川は指の上を歩き、手のひらの上に乗ると、足から綾瀬川の手のひらの中に溶け込んでゆき、あっという間に頭の先まで溶けてなくなってしまった。

「それでもう君が他人から幸運を奪い取ることはなくなった」

綾瀬川は右手を引っ込めながらそう言った。

「もう双葉で遊んでも面白くないし『止めてほしい』なんて言われちゃっただけムツとしたから、殺しちゃおうとも思ったけれど…君の勇気に負けたよ。すごい勇気だね、双葉。その勇気があれば、なんだってできると思うよ」

それは一切の裏を含まない、純粋な賛辞だった。綾瀬川から双葉への、心からの贈りものだった。

「私はもう消えるよ。さよなら。双葉」

「え…？あ…！」

綾瀬川はそう言って立ち上がると、部屋のドアに向かって歩いてゆく。双葉は綾瀬川と話がしたかった。双葉が自分だけの正義を見つけた過程を、綾瀬川に聞かせたかった。双葉だけの正義とはどんなものなのかを、もっと詳しく綾瀬川に教えたかった。そして綾瀬川がどんな反応をして、どんなコメントをするのかを知りたかった。綾瀬川はどこか大人びた笑顔を浮かべた。

今まで綾瀬川が見せていた、無邪気で子どもじみた笑みとは違う、静かで温かみのある、優しい笑顔だった。

「双葉。自分を信じなよ」

そう言って、綾瀬川はドアを開けて部屋から出ていった。

番外編その壱「セイギ」(9)

綾瀬川が双葉の部屋に現れ消えてから十日が経った。

双葉は綾瀬川の言葉を信じ、綾瀬川が消えた次の日から学校に通いはじめた。双葉の周りの人間が遭っていた悪い事がたて続けに起こる奇妙な状況が終わり、平和がもどった。

双葉はいま学校にいるが、前ほど嫌な気分ではなかった。昔と変わらず勉強も運動も苦手のままだが、自分の意見を綾瀬川に通すことができたということと、双葉だけの正義が双葉の心を強くしてくれる。

「津山さん、今日の掃除当番代わってくれないかなー？」

用事のため双葉が席を立ち教室の中を歩いていると、広田美鈴がすれ違いざまにそんなことを言ってきた。双葉は美鈴の目を正面から見て、顔と気持ちを引き締めた。すると、言いたいことは意外にすんなりと声になった。

「…嫌。私、やりたくない」

「…えっ…？」

まるで予想外の返答に、美鈴は呆気にとられた。そそくさと教室を出て、歩きながら、双葉は「やった！ やった！」と心の中で何度もさけんでいた。

双葉を奴隷あつかいしてきた美鈴に、双葉は自分の口で嫌だと言うことができた。双葉はまた勝ったのだ。喜ばずにはいられなかった。

双葉はいつからか、自分を見限っていた。

「どうせ私なんか」と最初からあきらめて、一人で勝手に絶望していた。今の自分よりもより良い自分になるための努力もしていなかった。

自分の容姿、学力、運動能力、性格、才能など、いろいろと理由をつけては自分を生まれつきのダメ人間であると決めつけていた。

自分の限界を決めつけて、可能性を追おうとしなかったのだ。

しかし双葉は気づくことができた。

そうやって自分はこの程度だと思いこんでしまうのは、いけないということ。

そして『今までとは違う自分に生まれ変わろうという意思』と、『前に進むための勇気』があれば、自分は変わっていけるのだということ。

番外編その壱「セイギ」(10)

「双葉。がんばりな」

中学校の校舎を仰ぐ綾瀬川の口を勝手について出た、独り言だった。

誰にも聞こえない、双葉にも届かない無意味な言葉だったが、それを言った綾瀬川はなぜか良い気分だった。

他人に迷惑をかけないという双葉の正義と、自分が生きるためなら人間が破滅しようが死のうがまるでかまわないという綾瀬川の正義。この二つの正義はそれぞれ性質が違いすぎて、絶対に交わらない。双葉と綾瀬川が本心から分かり合えることも、永遠にない。二人はそれぞれ別々の道を歩き、そして互いに離れてゆき、いつかは姿も見えなくなる。

綾瀬川は校門を出て、双葉が向かった方向の反対に歩き出した。

双葉は綾瀬川を恨んでいるだろう。憎んでいるだろう。綾瀬川はそれはべつにかまわなかった。もともと綾瀬川の心は、他人からの憎悪で痛みを受けるようにはできていないのだ。双葉が自分を信じ、勇気をもって前に進んでくれたらいいなど、綾瀬川は思っていた。

その思いを胸にしまい、今日はなにをして暇をつぶそうかなと考えながら、綾瀬川は歩いて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1837t/>

かむがたりうた

2011年10月8日21時01分発行